

松山東雲女子大学
人文科学部紀要

第 32 卷

【松山東雲女子大学開学30周年記念号】

松山東雲女子大学

2023 年 3 月

目 次

松山東雲女子大学開学 30 周年記念 特別寄稿

「女子教育の 30 年を振り返って～松山東雲女子大学の 30 年～」

巻頭言	松山東雲女子大学 学長 高橋 圭三	1
松山東雲女子大学 年譜		2
特別寄稿		
ジェンダー・フリー社会の多様性—— 松山東雲女子大学 30 周年に想う	別府 恵子	3
建学の精神を思う	磯村 滋宏	6
女子教育の 30 年を振り返って～松山東雲女子大学の 30 年～	塩崎千枝子	8
「古くて新しい大学」松山東雲女子大学	川東 英子	11
女子大での英語教育	松本 達也	14
地域文化の継承～庚申庵の事例に学ぶ～	松井 忍	17
建学の精神の歴史的過程と位置づけを振り返る	高木 総平	20
松山東雲女子大学 30 周年に寄せて —教育の基本としてのコミュニケーション—	児嶋 雅典	23
無限の可能性を持つ女子高等教育： 更なる「たおやかさ」を拓くために	若林 良和	26
「松山東雲女子大学日本語教師養成プログラム」を振り返って	向井留実子	29
開学 30 周年を機に思うこと	小西 敏雄	32

論 文

山口 真美・瀬戸 麗・王 一瓊・ハヤシザキカズヒコ ： マイノリティの子ども・若者の学力保障と進路保障 —イギリスでのフィールドワークに基づいて—	35
山口 真美 ： 学級通信にみる保護者への「お願い」 —小学校学級通信の分析を通して—	60

研究ノート

小西 敏雄 ： 提出課題の相互評価に関する分析について	69
--------------------------------	----

松山東雲女子大学開学 30 周年記念 紀要 32 巻の発刊によせて

松山東雲女子大学

学長 高橋圭三

女子教育をさらに充実へと東雲学園理事会は 1984 年に動き始めた。そして、1992 年に本学が歩み始め今年で 30 年を迎える。学園通史等には、構想段階で四年制女子大学の開設を期に、小学校や大学院も視野に女子教育一貫体制を完備した学園の夢が膨らんでいた。近年、この先達の深慮遠謀が時代の流れで具現化し始めている。1992 年は 18 歳人口がピークであった年である。まさに、開学年を境として 18 歳人口減を承知で乾坤一擲の思いで開学に踏み切ったことが推測できる。今我々に何ができるか、これからの女子教育とは何か、そして IT 技術躍進の中で望まれる女性人材とは何かを問い直す時かもしれない。

国の流れは文理融合を基に本学にも理系の情報教育の要望は強くなっている。ここ数年間、携帯端末でネットに何時でも何処でも繋がる時代になった。まるで大きな図書館を持ち歩いているようである。かつて、子の親達には多くの知識を身に付ける学習が教育であると理解されていた。ならば、携帯端末さえあれば学習・教育は必要ない。だがしかし、教育は「自ら考える」や「主体的に関わる」といった身に付けた知識の上に、否、知識量以上に個々人の前頭葉の働きに重きを置く。その前頭葉の働きは具体的経験がなければ活性化しないことは学術上証明されている。我々大学人に求められるのは、キャンパス内で得た知識や技術を地域社会の具体的場で体験し、生きた知識をもつ人材育成であると考え。更に、ダブル・エンロールメントやダブル・メジャーが一般化している。これは学生のみ限定しているのではない。現に基幹教員として複数の大学に籍を置くことも認められようとしている。研究者の知的資源をより多くの学生に提供し、多くの領域分野の異なる研究者同士が関わり、学問的・技術的な創発が可能になる。より深い専門性をより多くの学生にということかもしれない。

日夜、加速度的に有為転変する時代に我々大学人には個々の研究に裏打ちされた教育実践が求められる。幼稚園から小中高と国は幼稚園教育要領や学習指導要領に教科等の目標や教育内容を示している。しかし、大学教育においてはどうか。大学学習指導要領などと言うものは聞いたことがない。学校教育法に**大学は学術の中心として広く知識を授けるとともに深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用能力を展開させることを目的とする**とある。内容は自由に各大学でカリキュラムを編成できる。つまり、研究のないところにシラバスはない。そしてこのシラバスは学生の学費出費に対する商品の概要であり、教育内容を示す重要事項説明書兼利用契約書である。

研究紀要に投稿された研究がシラバスに反映され建学の精神に則った女性人材育成に寄与できることを強く深く望む。最後に投稿された教員の皆様に最大の感謝を申し上げる。

松山東雲女子大学 年譜

西 暦	事 項
1992 年	「松山東雲女子大学」開学 初代学長 岡本道雄学長就任 人文学部（人間文化学科・言語文化学科）161 名入学
1998 年	人文学部言語文化学科を国際文化学科に名称変更
1999 年	女子大学第 2 代 別府恵子学長就任 人間心理学科の新設により 3 学科体制となる
2003 年	人文学部再編により人間文化学科の名称変更
2006 年	松山東雲学園創立 120 周年
2007 年	女子大学人文学部を人文科学部とし、心理子ども学科・国際文化学科を新設
2008 年	女子大学第 3 代 磯村滋宏学長就任
2012 年	女子大学第 4 代 棟方信彦学長就任（短期大学学長兼任） 女子大学開学 20 周年
2016 年	松山東雲学園創立 130 周年 女子大学第 5 代 塩崎千枝子学長就任（短期大学学長兼任）
2019 年	女子大学第 6 代 高橋圭三学長就任（短期大学学長兼任）
2022 年	女子大学創立 30 周年

松山東雲女子大学開学 30 周年を記念し、歴代学長、歴代学科・専攻主任、本学にご縁のある先生がた、ご在職中の先生より特別寄稿をいただいた。

ジェンダー・フリー社会の多様性—— 松山東雲女子大学 30 周年に想う

Women's Choice in Gender-free Society—on the Thirtieth Anniversary of
Matsuyama Shinonome Women's College

松山東雲女子大学第 2 代学長 別 府 恵 子

Keiko BEPPU

(松山東雲女子大学名誉教授、神戸女学院大学名誉教授)

The seed of faith, hope, and love	いまは、むかし
planted in great need	播かれし種の
is bearing fruits in the land of Dawn.	ゆくすえを語り伝えて
Hundred and twenty years come and gone.	百二十年

「光陰矢の如し」とか、松山を離れてあっという間に 15 年の歳月が流れました。世紀の過渡期 (1999-2007)、桑原キャンパスで過ごした 8 年の歳月を振り返り感慨無量です。冒頭に引用の詩は『松山東雲学園創立 120 周年記念誌』ⁱ 刊行に際して寄せた詩。当時、松山東雲女子大学創立 14 周年、そして今年 30 周年。その 30 年間、桑原キャンパスで過ごしたすべての学生、卒業生たち、教育・研究に携わった教員そして大学運営を支えた職員の方々と、女性の高等教育に専念してきた歳月をともに喜びたいと存じます。

I

21 世紀に入ってすでに 20 有余年。短期大学、四年制大学、さらに大学院に進学する女性は決して珍しくはありません。しかし、いまだに中近東では、女子が教育を受けることが禁じられている国が存在するのも厳粛な事実です。振り返れば、19 世紀後半、女性に高等教育をとの遠大かつ火急の必要性に応じて、いわゆる “seven sister colleges”ⁱⁱ と称せられる、リベラルアーツ・カレッジがアメリカ北東部に創立され、それに倣って日本でも、女性のための大学が各地に設立されました。ところが、周知のとおり、20 世紀も後半になって、女子大学の不要・廃止論が国内外で、世論を沸かせました。すでに昔のできごとになっています。いち早く、「女子教育」の必要 (in great need) に応じて、松山東雲学園 (1886 年) が創立され、「播かれた種」が、短期大学 (1945 年)、四年制大学 (1992 年) と成長して枝を張る樹となったのです。その経過の詳細は前出『松山東雲

学園創立120周年記念誌』などに譲るとして、筆者が関わった時には、時代の変化で女子大学の共学化が教育界のみならず社会問題として熱い議論がなされ、前出のアメリカの名門女子大学のなかには共学に移行する大学がありました。日本においても、女性の高等教育存続のため共学化に踏み切った大学もあります。そうした、社会情勢の変動は、教育界に大きな「改革」を迫ったのです。本質的な教育理念とはすこしずれた、18歳人口減少に伴う定員確保という運営上の経済理由が大きな要因だったと理解しています。

II

歴史的な女子大学の共学化には賛否両論、共学化の結果もプラス、マイナスがありました。現在では、「共学化」是非論は下火となり不問になっているようですが、筆者が学長の任にあった時期はまだ、女子大学の共学化が高等教育そして運営上の深刻な課題でした。大学運営者は、本来の教育・研究目的そしてその運営に頭を悩ませました。本学では、定員確保の対策として、日本語習得を志望するアジア諸国（韓国、中国、モンゴル、マレーシア）からの正規入学を施行、また、英語を第二外国語とするこれらアジア諸国と英語教育についての共同研究などを積極的に取り入れました（写真）。また、国公立志向、地方都市から首都圏所在の大学への進学者の増加、男女共学化志向が拡大するなか、学生たちが、本学にない専門科目が履修できるよう、近隣の国立大学との「単位互換協定」を締結しました。



そして、ジェンダー・フリー社会への進行を見据え、「従来女性に特化された職種」の多様化に対応すべく、当初の人文学部人間文化学科、言語文化（国際文化）学科2学科体制から、1999年に人間心理学科を増設、一学部3学科体制を敷きました。さらに、大学教育をめぐる改革と急激な時代の要請に備え、人文学部改組に取り組み、2007年から、「人文学部」改め「人文科学部」とし、心理子ども学科、国際文化学科2学科に編成し、新設の子ども心理学科は、短期大学との緊密な連携・協力を射程に入れ、心理学、社会福祉学、教育学に加え、保育学をと、専門領域を拡げて、少子高齢化社会／時代に対応できる学問領域の充実を目指して、学部名称変更、新設学科申請のため、文部科学省に出向いたことを思い出します。

それから、すでに15年。加速する時代、社会情勢の変動に呼応して、本女子大学の教育課程もより現状に則したものに改組、編成（現代ビジネス学科、栄養食物学科を増設）が繰り返されるのを、退職者として遠くから見守ってきたのです。しかし不思議に、筆者の知る限り、共学化への移行は深刻な話題にならなかったと記憶しています。それは、短期大学、女子大学ともに、学園建学

精神の根幹にあるキリスト教主義教育「信仰、希望、愛」という理念の賜物と、「松山」というユニークな地域性に支えられているからだと考えます。国立愛媛大学、私立松山大学、共学化となった聖カタリナ大学などを擁した、松山という教育/文化コミュニティーに負うことが大きいと考えます。そのなかで、女性に特化したリベラル・アーツ大学として、高校生へ多様な選択肢を提供してきたからです。

Ⅲ

ジェンダー・フリー時代に適応した教育体制では、ジェンダーレス（男性、女性の違いの否定）でなく、男性、女性、多様な性向（LGBT）の個を平等、公正に許容した上で、自由かつ責任ある人格の育成を目指しているからです。人文学＝「ヒューマニティーズ」が軽んじられる昨今、大学で教養が身につかないとの苦言をしばしば耳にします。リベラル・アーツ教育は、人が人であるために、不可欠かつ重要な学問領域。アナログからデジタル社会に大変身するいま、IT教育、AI活用は確かに生活をより豊かにする道具ですが、それを使用するのは、知性、感性を有する生身の人間であるのですから。

おわりに、長い歳月に熟成された、松山という地域文化に本女子大学生たちが「播いた種」——復元庚申庵の由来を述べて本文を閉じたいと思います。松山輩出の俳人栗田樗堂の草庵の復元契機となったのが、松山市が企画した「チャレンジ松山21——学生による政策論文」（2000年）に応募した学生たちの論文「薄れゆく、松山の俳人栗田樗堂」。同論文が最優秀賞を受賞、彼女たちの提案に応えた松山市政のヴィジョンとその施策の果実が、NPO法人庚申庵倶楽部に結実したのです。ⁱⁱⁱ 味酒町に復元された庚申庵に設置された同倶楽部は年2回の会報刊行、ほか多様な文化講演会やイベント、フィールド・トリップを企画し、地方、国を越え、俳文学に代表される地域文化の普及に貢献しています。（2013年には日本文学研究者ドナルド・キーン氏を名誉会員に登録。）

これからも、庚申庵倶楽部の英文名称（Green Culture in Matsuyama）が明示するように、身の環境保全とその育成に配慮した視点、敢えて言うなら、「女性」特有の視点、思考から芽生えた、ジェンダー・フリー社会における広く、多様な選択を前提に倶楽部の活動が期待されると確信しています。

注

- i 『松山東雲学園創立120周年記念誌』（120周年記念誌編纂委員会、2006年）。
- ii Barnard, Bryn Mawr, Mount Holyoke, Radcliffe, Smith, Vassar, Wellesley の7大学。現在、Vassar は1969年に共学、Radcliffe はその一部だった Harvard に1997年に合併され、現在は共学。Barnard も Columbia と合併して共学。
- iii 詳細は松山市の広報誌ほか参照。また、拙書『回想録——生かされ、生きて七十年』（キリスト新聞社、2013年）の第5章「随想——松山つれづれ」をご参照ください。

建学の精神を思う

The Fundamental Spirit of College

松山東雲女子大学第3代学長 磯村 滋 宏

Shigehiro ISOMURA

(松山東雲女子大学元教授)

松山東雲女子大学創立30周年を、発展のうちに迎えることができたのは、全ての関係各位の御努力の賜物である。心からお喜びを申し上げたい。この間に多くの有為な人材を世に送り出し得たことを、皆様方と共に誇らしく思う。社会が少子高齢化に向かうと同時に、私立大学の数は増え続けてきた。この中で、教育の質の向上と経営の維持を両立させることは、困難なことであつたに違いない。私自身はこの間、わずかな期間（2007～2011年）にこの仕事に関わつたにすぎないが、それでもこのことを十分に理解し得たと同時に、不十分なことしかなし得なかつたことに心残りを禁じ得ない。しかしながら昨年9月初旬に、久しぶりに本学を訪れ、かつての同僚（戦友！）の方々とお会いして親しくお話をできたことは、非常な喜びであつた。その際にいただいた次年度向けの大学案内には、高橋圭三学長の建設的なメッセージと共に、建学の精神が明記されてあつた。私の在任中、当時の山崎正幸宗教主事らと共に、本学の建学の祖・二宮邦次郎牧師の抱いた精神「信・望・愛」を、心を込めて明文化したものである。

「松山東雲学園の建学の精神は、「信仰・希望・愛」であらわされるキリスト教精神です。本学園は、この精神に基づき、神を畏れ、神による希望に生き、神と隣人を愛する、自立した女性を育成する教育をめざします。」

現在、我が国の国公立大学に比較して大多数を占める私立大学には、それぞれ独自の建学の精神を表明する義務がある。これがなければ建学の意味が薄れてしまうのは、当然のことである。大学は専門教育の機関であり、社会の特定分野で役立つ人を送り出すために、人材を育成する場である。「建学の精神」とは、そこで行われる教育の基本となる精神であり、それが向かう方向である。松山東雲女子大学は、この精神を、二宮邦次郎牧師が設立した松山女学校、その後開学した松山東雲短期大学から引き継いで歩んできた。その中心となる柱は、キリスト教精神である。

個人的な話になるが、私が70歳を越えた身で本学の学長の重責を荷わせていただく決心をしたのは、実に、このキリスト教精神が本学に生きていることを確かに伝え聞いたからであつた。無論私は、キリスト信徒の中にあつては、その道の落第生であろう。ただ、落第の身ではあつても、約半世紀の間、よろめきながらも、この道を歩み通してきた者が精一杯の努力をすれば、これを守り

通せるのではないか。神が助けて下さるであろう、と考えた次第であった。もうひとつ、私には忘れ難い体験がある。

本学就任の数年前のことであったと思う。当時私が所属していた「応用物理学会」の年次総会が、仙台市の東北学院大学で開催された時のことである。大会初日の夕刻、参加者一同が広い会場に集まり、懇親会が催された。約 1,000 名ほどが参加したであろうか。全く自由な懇親の場であるから、当然ながら会場は雑談のざわめきで満ちていた。その最中、突然に、壇上から、整然とした白と黒の正装姿の混声合唱団（総勢 40 名程であったろうか）の歌声が流れてきた。本学でもなじみ深い賛美歌 312 番の斉唱である。私は、我を忘れて聴き入った。「慈しみ深き、友なるイエスは、罪とが憂いを、取り去り給う、……」ざわめきが治まるまでに、時間はかからなかった。会場にいる全員が壇上を注視して、黙って耳を傾けた。圧倒的な迫力に加えて、清純さと慰めに満ちた空気が会場に溢れた。私には、今でも忘れ難い思い出として残っている。キリスト教主義を掲げる大学ならではのことであったと思う。これは東北学院大学の「建学の精神」（3L 精神——LIFE（命）、LIGHT（光）、LOVE（愛）——聖書、マタイによる福音書 5 章）を表しているのではないか。“本学の教育の土台は、この精神です”との主張が聞こえてくるように思えた。

ついでながら、東北学院大学は、愛媛県といくつかのつながりを持つ。創立者は、明治・大正期に活躍した我が国の著名なキリスト教伝道者、押川方義で、彼は松山市出身である。今や 9 学部、学生数 11,200 人の総合大学で、東北地域の私学の雄として知られる。さらにカール・バルト研究で著名な佐藤司郎先生は、かつて同学文学部で長く教鞭をとっておられたが、それ以前は、愛媛の大洲教会の牧師を務められた後、東京の信濃町教会（私の在京時の母教会）の牧会をされ、その後同大学に移られた方である。私は本学の学長時代にたまたま発生した東日本大震災の直後、同大学にお見舞いに出向いた覚えがある。

話がかなり偏ったものになってしまったが、現職から退いた者としては、表題のような大きなテーマの一般論を述べることは、むずかしい。要は、私立大学の建学の精神には、建学者が建学の際に抱いた強い願いと夢が込められているということである。これは、その学校（大学）が続く限り堅持されるべき精神である。松山東雲女子大学にあっては、二宮邦次郎牧師が抱いた強い信念「信・望・愛」のキリスト教精神がこれで、そこに基礎をおいた教育こそ、間違いなく社会に真の奉仕ができる教育である、という確信である。創立 30 周年を迎えた本学の前途には、幾多の困難が待ち受けているであろうが、それらを神の助けと導きによって乗り越え、さらに発展されることを、心から切望する次第である。

女子教育の30年を振り返って ～松山東雲女子大学の30年～

Thirty Years of Women's Education in Matsuyama Shinonome College

松山東雲女子大学第5代学長 塩崎 千枝子

Chieko SHIOZAKI

(松山東雲女子大学元教授)

もう30年数年も前のことになるが、松山に居を移したのを機に、私は短期大学英文科の教員になった。女子校は初めての経験で、その華やかな雰囲気や眩しく、明るく元気な学生たちとの交流はとても楽しかった。当時、大学のキャンパスは若い学生の占有の場だったが、社会人学生として米国の大学で学んだ自分の経験から、日本でも是非、社会人にも開かれた多様な価値が交錯する大学キャンパスを実現しようと、1991年に学園オープンカレッジの開設に漕ぎつけた。社会人向けの公開講座だけではなく、社会人に正規授業の聴講をも認める取り組みは、当時の日本の大学文化には馴染みがない新しい試みとして注目された。本学園の開かれたキャンパスづくりはその後も継続し、今日まで女性活躍への学び直しのキャンパスとして重要な役割を果たしてきたことを大変嬉しく思う。

時は昭和から平成に移る頃で、バブル崩壊以降の経済停滞はまだ長く続いており、短期大学の人気は高く、学生募集は堅調であった。18歳人口がまもなくピークアウトすると予想されていたものの、大学進学率の上昇により当分は学生数が確保できると見込まれた。1985年の男女雇用機会均等法成立を機に、「女性の社会参加」への意識が高まり始めた時期でもあった。愛媛でも女子の高等教育進学率はこれから高まると予想され、女子教育の伝統の学府として、東雲学園はより積極的に地域と時代の要請に応えたいという意気込みが四大設置構想に繋がった。大先輩の那須野、石丸両先生、植松事務長、そして同僚の青野さんと私の5人で大学設置準備委員として大学構想を練り、侃々諤々の議論を重ねる日々が続いた。

男女平等の時代に今さら女子大にする意義は何か、共学にすべきではないか、など、教員間でも熱い議論が続いた。私自身は共学志向に傾いていたが、学園の歴史、伝統、ミッション、時代の変化への対応、ニーズ、コストなど、様々な角度から検討する中で、伝統を守りつつ新しいものを創ることの難しさと面白さを勉強させてもらった。

1992年春、ピンクの新校舎も完成し、四国唯一の女子大学としての期待の中で人文学部に人間文化学科と言語文化学科の2学科を持つ松山東雲女子大学が開学し、初代学長に元神戸女学院学長

の岡本先生が着任された。

女子大学は、教養系大学として、学生の主体性を重んじる自由度の高いカリキュラムを特長とし、4年間の幅広い学際的な学びを通じて、自律的な探究意欲と自立能力の涵養を目指しており、2年間で資格取得を目指して体系的な専門教育を提供し、専門職への就職実績を誇ってきた短期大学との間に、教学面でのアプローチや学生との関わり方の違いが次第にはっきりしてきた。学生募集、学生生活支援、就職指導などでもそれぞれのやり方で動く両大学を一つの組織で支えてきた大学事務の皆さんは、随分苦勞も多かったのではないかと、今改めて関係者の努力に頭が下がる思いである。

2つの異なる大学組織が隣り合うことは難しさもあったが、多様なキャンパス文化を育てる強みともなってきた。多様化する学生ニーズに如何に応え、良質な教育を提供していくのか、各大学、学科が互いの個性を認め合いつつ協働する努力と、そしてそれらを包摂する東雲教育の共通の価値とを求め続けてきた30年間であったように思う。

女子大学はこの間に時代の変化に応じて何度かの名称変更や改組を行い、徐々に専門資格の取得も強化してきた。現在は人文科学部心理子ども学科のもとに子ども専攻と心理福祉専攻の2つの専攻課程を置き、現代社会の大きな課題となってきた「子ども」と「こころ」を学びの中心に据えた専門家育成に取り組んでいる。

生まれたての大学の基礎固めのために歴代学長には力を発揮していただいていた。岡本初代学長はキリスト教精神に基づく教育理念とリベラルアーツの本髄を示され、女子大学の礎を築かれた。第2代別府学長は、女性活躍の時代を魁る学生憧れのロールモデルとして、一人ひとりを大切にす女子教育の実践に力を尽くされた。第3代の磯村学長は短大の学長も兼務され、漸く実現した学長一人体制で、両大学の連携と、キリスト教精神の伝統を大切にした教育環境づくりに尽力された。第4代の棟方学長は経済界での豊富な経験を活かして大学マネジメントに当たられ、生き残り戦略をかけたビジネスモデルとして大学の将来戦略を導かれた。

大学の30年の歩みはでこぼこの山道続きのようであった。年々忙しく、厳しさを増す学生募集に走り回り、多様化が進む学生のための豊かなキャンパスづくりに汗をかき、配慮を必要とする学生のためにきめ細かいサポート体制を用意するなど、教学面以外の仕事も増え続けた。両大学の共同歩調も少しずつ整い、教職員挙げて良く努力をしてきたと思うが、頑張ってもなお、その先が見通せない徒勞感もあった。

私は2016年から学長職を一期務めさせて頂き、大学運営の大切さと難しさを学ぶこととなった。全国の大学で生き残りをかけたガバナンスの強化と教育改革の努力が加速化し、日本の大学に大きな質的転換が起きつつあった。先行する他大学の改革への取り組みから、それまでの真面目な努力だけでは通用しないこと、それらの努力がアカウンタブルであるどうか、その成果が検証され、評価され続けなければならないことを、そして何よりも先ず、大学教育には明確なビジョンと戦略性がなければいけないことを教えられた。

大学の管理運営および教育活動全体の構造改革が喫緊の課題であった。ディプロマ、カリキュラム、アドミッションの3ポリシーに基づく教育体系の見直しと再構築、そして自己点検と評価の徹底による教育の質保証という重要課題に取り組み、大学教育とは何か、教育力をいかに高めるかを考え続けたやり甲斐のある、しかし根気がいる地味な日々が続いた。全学挙げて取り組んだ極めて重要な過程であったが、直接の教育活動ではなく手応えの得にくいデスクワークの繰り返しに、教職員の間に疲労感が募っていくのを感じていた。

カリキュラム改革の一つの柱として取り組んだのが共通カリキュラムの導入であった。各大学、学科が別個に置いてきた教養系科目を整理統合し、共通の時間割枠に配置し、所属を超えて誰でも受講できるように図ったもので、教養科目群の体系的整理、非常勤講師の経費削減、大学と短大の学生および教員間の交流の促進、そして地域との協働による東雲ブランドの講座開発などの目的を併せ持ち、両大学の協働を実体化する一手として大事な改革であったと思う。だが、多くの教職員を巻き込み煩瑣な作業を強いることになってしまったことは申し訳なかった。

今、短大時代から慣れ親しんだ旧校舎の跡には明るい新館が建ち、一面にクローバーが広がる中庭には四季折々の花が咲く美しいキャンパスが整備された。友や学生たちと泣き笑い、長い月日を共に過ごした大学は、私にとっても大切な学び舎であった。コロナ禍で簡単に訪れることも叶わなくなりましたが、学生や教職員のことがいつも気にかかっている。

松山東雲女子大学が創立30年を迎えた今日、わが国の高等教育が大きなパラダイム転換を求められる中で、選ばれる大学であり続けるためにどうすればよいのか、地方の小さな女子大学の使命と役割をこれからも問い続けることになるだろう。

変化が激しい不確実性の時代は、自ら学び、多様な他者と協働しながら新たな未来を創る意欲と能力をもった人材を求めている。大学にとっては厳しい時代が続くが、女性が生涯を通じて豊かに学び育ち、やがて世の礎となって人と社会のために働くことのできる人となるために東雲教育があると信じている。良き伝統を守りつつ変わる勇気と力を持ち、これからも時代を魁る人材育成の大切な使命を果たして欲しいと切に願っている。

「古くて新しい大学」 松山東雲女子大学

“Old and New College” Matsuyama Shinonome Women’s College

川 東 英 子

Eiko KAWAHIGASHI

(松山東雲女子大学元教授)

松山東雲女子大学創立 30 周年おめでとうございます。

私は、松山東雲女子大学創立時（1992 年）に就任し、2015 年 3 月に定年で退職しました。長い非常勤講師生活を経て、晴れて専任教員で就職できた記念すべき大学でした。

この度松山東雲女子大学創立 30 周年に当たり、松山東雲女子大学・短期大学紀要・研究論集委員会（委員長・中島悦子講師）から、特別寄稿のご依頼を受けましたので、松山東雲女子大学の女子教育について、在職時を振り返りながら、感想を述べさせていただきます。

「古くて新しい大学」松山東雲女子大学のことをそう表現されたのは、初代学長の岡本道雄先生でした。「四国最古 100 年余の女子教育の伝統を継ぐという意味で古く、現代女性に必要な最新の教育内容を学際的・複合的に提供するという意味で新しい大学」¹であると言われたのです。

松山東雲学園のルーツは、1886（明治 19）年に創立された「私立松山女学校」です。創立者は、新島譲に導かれた二宮邦次郎牧師（わが国プロテスタントキリスト教教育の三つの源流の一つである「熊本バンドと同志社及び組合派教会」²所属）でした。勉強がしたいという重松テイの要望に応え、わずか 2 名の生徒のために学校を創立したのです。

松山女学校は創立早々評判が高まり、県下からたくさんの入学者が集まりました。この評判をもたらしたのは、二宮牧師の女子教育に対する「高い理想とフロンティアスピリット」であったと思います。二宮邦次郎は遺稿の中で「女性独特の技芸を身につけさせることが女子教育なのではなく、まず女性自身が、女性である前に人間として価値ある存在である事実の開眼して、人間の尊厳の認識と自覚を持つことができる人に教育するのが女子教育なのだ」³と述べています。

戦前の女子教育の主流は「良妻賢母」教育であり、女性は一人の独立した人間として認められず、何よりも夫に仕え、子供を養育する母となるよう教えられてきました。そのような時代に、女性の人間としての尊厳や価値を覚醒させ、女性に豊かな教養と品格を養うことを目的とした教育こそが女子教育である、と考えたのです。

私はこのような女子教育観に接し感動しました。また、その伝統が、戦前・戦後を通じて、社会運動家や政治家など素晴らしい先輩を生み出したのであり、この学園を誇りに思いました。

松山東雲女子大学の新しさは、時代の要請に応える大学であるということです。まず第1に、1990年代の早期に4年制大学を創立したことです。それまで女性の学歴は高校が主流でしたし、また女性は短大でいいという考えも根強く残っていました。しかし1990年代に女性の4年制大学への進学は一気に進み、4年制大学の創立は、時代の趨勢を読んだ松山東雲学園の革新的英断であったことを証明しました。

松山東雲女子大学の新しさの第2は、学部を、これまで女子学生の多かった文学部・家政学部・教育学部ではなく、人文学部にしたことです。しかも学際的・複合的な教育内容の、教養学部に近いベラルアーツ教育を目指したことです。それは「国際化、情報化、高学歴化、女性の社会進出、生涯学習などの時代の要請に対応して、これからの社会にとって真に有用な女性の育成をめざすという社会的な必要性」⁴に応えるためでした。

松山東雲女子大学は、「人間文化学科」と「言語文化学科」の2学科からなる「人文学部」として発足しました。私が属したのは人間文化学科でした。本学のカリキュラムの特徴は、学際性・複合性ととも、キリスト教学が基礎に据えられていることと、女性学（ジェンダー学）関連の授業科目がおかれていたことです。「女性史」「女性社会学」「女性職業論Ⅰ・Ⅱ」など女性を冠した授業科目だけで4科目ありました。わが国で1980年代から始まったばかりの女性学関連科目が存在したことは、松山東雲学園の女子教育の伝統が引き継がれていたといえるのではないのでしょうか。

松山東雲女子大学は、1999年度には、従来の2学科体制から「人間心理学科」を加えた3学科体制に拡充し、入学定員もそれまでの160人から260人に拡大しました。しかし2000年に入った頃から、バブル崩壊後の長い不況と18歳人口の減少、加えて大綱化の影響で都市圏の有名大学をはじめとする学部・学科の新増設もあり、本学の学生確保が困難になっていきました。

そのような困難を克服するため、①キャリア論（職業論特講）の立ち上げ、②資格重視、③入学定員の削減と学部・学科再編などの検討が行われました。キャリア論は、1990年代の長期不況下で学生が就職難に陥るなか、学生自身の就職意欲や能力の喚起を図る必要があると考えられ、授業科目に加えられたものです。ただし、私としては、企業側の対応（非正規雇用化）にも問題・原因があり、また「就職」だけに焦点を絞るのではなく、生涯を通して「働くこと」を人生に位置づけてほしいと考えていました。

資格志向については、様々な資格を取得できるようにカリキュラムが変更されました。将来の就職に繋がるような学術的資格だけではなく、簡易な資格や趣味的な資格も導入され、資格偏重の雰囲気があった時もありました。

そのような試行錯誤の中、一貫して追求されたのが、募集定員の削減であり、学部・学科の再編でした。学部・学科の再編案は二転三転し、3学科体制は「心理子ども学科」と「国際文化学科」の2学科体制へ（学部名称も「人文科学部」に変更）、さらにその後「心理子ども学科」の1学科体制に縮小再編されました。本当に重苦しい時代でした。私の勤務した20余年のうち、前半の10年は明るく、研究時間も保障された素晴らしい大学（研究）生活でしたが、後半の10年は、縮小・

再編が常に付きまとい、また入試対策に多くの時間を要するようになって、研究環境も悪化してきました。

このような大学環境の悪化は、文科省の高等教育政策の転換によるところが大きかったようです。1991年に打ち出された大学設置基準の大綱化は、18歳人口がピークアウトして以後急減局面に入り、増えすぎた大学定員を満たすことのできない大学の淘汰が予想されるなか、それを「市場」に任せるためのものでした。少ないパイを巡り大学に個性や強みで競争させ、大学の質を高めさせるため、矢継ぎ早の大学改革（「アメリカ式」と「会社式」の吟味不十分で粗雑な濫用・導入）⁵が行われ、大学の現場は混乱と疲弊に陥ったのです。

90年代の大綱化、2000年代の国立大学法人化、2015年の国立大学法人法の改正というように、国立大学においても新自由主義が一貫して展開されました。高等教育の過当競争に加えて、研究のためのお金も時間も奪われ、雇用も悪化し、果ては、大学の自治の「破壊」（学長権限の強化・支配）に至りました。その後さらに学術会議会員の任命拒否まで起こり、日本の学術世界の民主主義度は、低下の一途を辿っています。

このような重苦しい状況のもとでも、現在の松山東雲女子大学は、子どもと心理を核に女子教育に取り組み、「大学改革」に挑戦しています。そして、「子どもを軸にした地域課題に取り組むプラットフォームの構築」で、「2020年度大学改革を成功に導く特色ある取組事例集」に選ばれました。時代の要請に応える地域課題やキャリア支援教育、そしてPBL（課題解決型授業）に取り組む努力に頭が下がります。

松山東雲女子大学は、開学以来、キリスト教と女性学にもとづく女性の人権教育を重視してきました。今後もその伝統・特徴を引き継ぎ、ジェンダー平等教育として発展させるとともに、子どもと心理の専門教育&資格教育と統合させていただきたいと思います。女性の社会参加に不可欠のジェンダー平等、特に女性差別撤廃条約の学習は重要です。また、福祉・保育系の専門職は典型的な女性職で、賃金や労働条件に恵まれないことも周知の事実です。現実を知り改革できる力を養成するためにも、労働法（特に女性の労働権）の学びは不可欠だと思います。

「古くて新しい大学」伝統の継承と革新の理念を堅持し、これからもますます発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

注

- 1 『松山東雲学園創立120周年記念誌』2006年、71ページ。
- 2 前掲書、3ページ。
- 3 前掲書、5ページ。
- 4 前掲書、67ページ。
- 5 佐藤郁哉著『大学改革の迷走』ちくま新書、2019年、参照。日本の大学が世界ランキングで順位を落とし続けるなど大学危機の理由に、矢継ぎ早の大学改革政策があるとし、改革のはらむ5つの「病根」を詳細に分析・批判している。

女子大での英語教育

English Education at Shinonome

松本達也

Tatsuya MATSUMOTO

(松山東雲女子大学元教授)

1992年に松山東雲女子大学が産声をあげたとき、ちょうどそれは私がそれまで勤めていた高等学校を辞した時でもあった。カッコよく言えばもう一度英語を本場アメリカで学び、M.Ed（教育学修士）を取得し、帰国後には英語教師の養成に携わりたいとの思いがあったからである。新設の松山東雲女子大も英語教員の養成を目指しており、1996年には文部省から「教職課程」の設置認可が下りたのであった。

帰国後、運よく松山東雲学園に採用され、1995年からは女子大学に勤務することとなり、誕生したばかりの「教職課程」を任せていただけることとなった。

女子大での勤務を思い起こすと本当に様々なことがあったが、そんな中で強く心に残っている「東雲の英語」に関わってきたことを振り返ってみたい。

まず第一は、やはり発足の当初から携わった教員養成についてで、その思い入れも加わり感慨深いものがある。認可が下りた1996年に早速短大からの編入生2名が受講し、翌年、本学での最初の免許状（高校二種免許）を取得した。1998年度には認可後初の「英語科教育法」のクラスで15名の受講生があり、その後2012年度の教職課程終止までに免許状を取得した者は107名を数えた。卒業生のうち何名かは現在でも学校現場で英語を教えていることは嬉しいことこの上ない。

教職課程の受講生は、「英語科教育法」で英語教育の目指すところを学び、そして最終学年では、審査に合格した者が「教育実習」を行うことで卒業時に免許状を取得することができた（二科目とも担当）。「教育実習」は、原則母校実習で、本人が母校へ出向き許可を得るものであった（中学校・高校のどちらでもよく、その結果取得できる免許状は、卒業時に中学校・高校の二種類であった）。実習中は大学側から担当者が実習校に伺い、実習受け入れのお礼と「実習中指導」を行っていた。遠くは沖縄・九州をはじめ山陰、山陽、近くでは高知、愛媛県内と実習中での訪問がかなり厳しい状況のときもあった。訪問中、うまく時間が合えば実習生の授業も観察ができ、堂々と授業を行っている姿には、担当者としてホッとした気持ちと誇らしい気持ちが沸き上がってきたものである。

次に記しておきたいのは、海外研修プログラムについてである。非常に充実した研修プログラムについての協定を幾つかの大学と結んでいた。アメリカのPitzer College（CA）での夏季研修、同

じくアメリカの Stephens College (MO) の Semester Program 及び語学・文化研修、さらにもう一つ Cedar Crest College (PA) での短期研修、それと中国の南京大学での短期研修であった。このうち特筆すべきは“Stephens Semester Program”である。このプログラムを希望する学生は審査（選抜試験）を受けることが条件だった。合格した者は一学期間同大学の学生寮に入り、大学で授業を受け、さらに受講生各自が決めたテーマに従って研修を進めていったもので、かなりの語学力と忍耐力が要求されるものであった。研修での成績は、帰国後本学の卒業要件単位として（8～10 単位分）認められるものであった。

この Stephens College での研修では「乗馬」のクラスも用意されており、プログラムに参加した学生たちは得難い体験をすることができた。

追記だが、2002 年に Stephens College からプログラム担当の Whitehill 先生と 10 名余りの学生たちが本学にやってきて交歓会を持つことができたことは外せない。

“Study Abroad Program”に関りを持ち、協定の各大学を引率者として何度か訪れることができたことは、参加した学生たちは言うに及ばず、言葉では表せないほどの素晴らしいものを得たことである。

海外での体験が貴重な人生の肥やしになるとの確信から、松本ゼミは卒業前に全員がアメリカに行っていた（ゼミ旅行）。約 3 年間滞在したボストンに毎年 10 日ほど行っていた。ボストンは歴史の街で、京都とは Sister City の繋がりもあり、市内には“Freedom Trail”が敷かれてあり、そこを辿ることでアメリカ誕生の歴史を直に感じることができた。さらに、Mayflower 号の到着した Plymouth、魔女裁判で有名な Salem、世界経済の中心地ニューヨーク等にも足を延ばし見聞を広めた。そんな中、2002 年春に NY を訪れたときのことは今でも強烈に頭に焼き付いている（前年の 9 月 11 日に世界貿易センタービル 2 棟がテロの標的になったが、その近くの建物の周りには、沢山の犠牲者の写真や“Remember 9-11”と手書きした垂れ幕等が多く貼り付けられていたのである）。その場に立っていると発する言葉もなかった。

三つ目に取り上げたいのは、高校生を対象にした女子大主催での Speech Contest (“Say What You Want”) を開いたことである。「英語の東雲」を売りにしている以上、英語を前面に打ち出した企画を是非持ちたいと思い、この案を実行に移したのである。秋に行われる「東雲祭」の目玉として実施することとした。裏方として支えてくれたのは松本ゼミの学生諸君だった。メインゲストには審査委員長と講演をお願いすることとし、お呼びする方は全国的に著名で誰でもよく知っている人にした。1997 年の第 1 回目は、審査委員長には当時「同時通訳」の第一人者として有名な松本道弘氏をお呼びした。近隣各県の高校に募集をしたところ、24 名の応募者があった。第 1 回の賞品は、優勝者には「研究社の英和・和英大辞典セット」と副賞として「沖縄旅行」（2泊3日、保護者 1 名同伴）が贈られた。第 2 回以降の主なメインゲストは、吉田研作氏（上智大学教授）、村松増美氏（サイマル・インターナショナル顧問）、マーシャ・クラカワー氏（聖心女子大学助教授）、松本和也氏（NHK アナウンサー）等であり、賞品も MD プレーヤー、iPod nano と変わった

が、沖縄旅行だけは継続した。第6回目からは「旺文社」が協賛として名を連ね、第10、11回大会には素晴らしい優勝トロフィーを寄贈して頂いた。また愛媛新聞社は当初から後援、翌日の紙面で大きく取り上げて頂いたことは本当に感謝に堪えない。

第11回をもってSpeech Contestは幕を下したが、参加してくれた高校生は延べ132名、参観者は約1400名を数え、「英語の東雲」の一面は示すことができたと思っている。

英語教育への関り、多くの先生方との出会い、更に、授業やゼミを盛り上げてくれた学生たちとの今も続いている繋がり——「東雲」での“irreplaceable”な「宝物」である。

地域文化の継承 ～庚申庵の事例に学ぶ～

Preserving Local Culture: Learning from the Case of Kōshin-an

松 井 忍

Shinobu MATSUI

(松山東雲女子大学名誉教授)

地方の大学にとって、そのよって立つ地域に関する学問的知見を地域の現実に沿って活かしていくことは重要な役割のひとつである。そして、その中心的な役割を学生が担うことは、地域社会の必要とすることでもある。近年は、学生が地域の課題に取り組み、現実の場で地域住民と関わることによって大きな学びを得る、という事例が多く見られるようになった。しかし、20年余り前はまたそうした先例はほとんどなく、庚申庵の事例はきわめて先進的な事例だったと言えよう。松山東雲女子大学創立30周年の記念の年に当たって、その経緯をまとめておくこととする。

庚申庵は、江戸時代の松山の俳人栗田樗堂が建てた草庵で、200年近くの間、何度かの増改築を重ねながら大切に遺されてきたものである。愛媛県の史跡に指定されて以後も個人が所有、管理していたが、傷みが激しく倒壊の危険が噂されていた。そこで、担当していた日本文化演習の授業の中で見学させていただくこととした。学生たちは、すぐに庚申庵の風情に大きな魅力を感じ、何とか保存することはできないかと考え始めた。その後、授業では庚申庵について調べるとともに、愛媛県や松山市の文化財担当部署に現状を問い合わせ、詳しいお話を伺い保存活用について意見を出し合うことになった。学生たちの行動力と発想の柔軟さには驚かされるばかりだった。

ちょうど議論を重ねていたころ、松山市が「学生による政策論文」を募集するとの情報を得、学生たちに伝えたところ、即座に応募することに意見がまとまった。学生たちから論文をまとめるために補講をしてほしいとの要望があり、授業時間とは別に時間をとったが、論文の構成・提言の内容などを議論し、国際文化学科2年の数名の学生を中心に論文の形にまとめることが決定された。完成した論文は、未熟さを持ちながらも熱意のこもった明確な主張の表現されたものであった。論文は、松山市に提出され、2000年2月、第1回「学生による政策論文」において優秀賞に選ばれた。学生たちの授賞の喜びは大きかったが、それよりもその後、松山市が庚申庵を公有化し、庚申庵史跡庭園として整備することが決定されたときの驚きは特別なものであった。学生たちにとっては、自分たちの提言が取り上げられ、実際に政策として実現されることの喜びはもちろんのこと、それ以上の責任を感じたことが伝わってきた。こうして松山東雲女子大学の学生たちは、受賞後の政策

実現の過程で実践的に地域の課題に取り組む機会を得ることになったのである。

庚申庵が解体整備される間、松山市の担当者と学生たちとの話し合いの時間が複数回もたれ、今後の活用方法などについての考え方が共有された。論文の中でも、その後の話し合いの中でも学生たちが主張していたのは、庚申庵を単なる観光スポットとしてではなく、松山市民が何度も訪れたいと思えるような場所にしたいということだった。庚申庵主の栗田樗堂が、連句の座として、また煎茶の庵として、その閑寂の時間を楽しんだという文化史的意義を踏まえた上で、静かに過ごす貴重な時間を持つことのできる身近な場所として親しんでほしい、ということだった。

2003年5月3日に庚申庵史跡庭園として開園することが松山市によって決定された。庚申庵の整備と開園後の活用については、庚申庵整備検討委員会が組織され、学生たちの意見を代弁するために私もその一員として参加することになった。委員会では、従来の行政による管理ではなく、民間の組織による新しい管理活用が望ましいとの結論が出され、それに伴って、2003年2月にNPO法人GCM 庚申庵倶楽部（以下、庚申庵倶楽部）を設立し、新しく誕生する庚申庵史跡庭園の管理活用を担うことになった。NPO法人自体がまだなじみのないもので、民間の組織が文化財の管理活用を担うという先例もない状態でのスタートであった。そのうえ、もう一つの大きな問題は、論文を書いた学生たちが既に本学を卒業し、ほとんどの者が松山を離れていたということである。そこで、新たに学生たちに参加を呼びかけることにした。11名の学生が庚申庵倶楽部の会員として協働してくれることになった。庚申庵倶楽部は、本学学生のほか、庚申庵の解体調査に関わった建築の専門家である松山東雲短期大学の犬伏武彦（敬称略）、郡司島宏美、ボランティア活動の専門家である本学の小泉勇次郎、学長の別府恵子、事務局の山内司の各氏のほか、近世文学の専門家、樗堂や地域文化の研究者、庚申庵の元の所有者、庚申庵の所在地である味酒地域の町内会の代表といった多彩な方々が参加してくださることになった。地域の方々と松山東雲学園の関係者による協働が始まったのである。

5月の開園までの準備は、慌ただしく進められた。学生たちは、庚申庵のガイドとしての講習を受け、実際に現地でのリハーサルを繰り返した。そのほか、開園記念式典やお菓子コンテスト、味酒小学校の子供たちによる発表、天野祐吉氏の記念講演とパフォーマンス、渡部章正写真展など多彩な開園記念イベントのための準備も同時に進めなければならなかった。5月3日から5日まで続くこれらのイベントでの学生たちの活躍は目を見張るばかりだった。3日間の来園者は4,000人を超え、周辺の交通整理をしなければならないほどの賑わいだったが、学生たちはイベントの運営、ガイドなどをこなしながら終始笑顔で来園者を出迎えた。来園者からは「ありがとう、頑張ってるね」との感謝や慰労の言葉がかけられていた。学生たちにとっては、その言葉が何よりのご褒美だったようで、笑顔はますます輝いているように思われた。地域社会から必要とされていることを実感できた経験は、学生たちにとって大きく、大学生生活自体の充実はもちろん、社会に出てからの活躍の原動力にもなったようである。大学の中での学びだけではなく、実際に大きな責任を担って地域社会に貢献できたことは東雲教育の大きな成果と言えよう。

庚申庵開園から20年を経て、学生との関わりがなくなっていることは残念だが、時折大学で庚申庵の話をする機会が与えられているのは、ありがたいことである。実際の社会の中ではいまでも男女共同参画が叫ばれており、真の意味での実現にはまだ至っていない現状がある。しかし、女子教育の場では、ひとりひとりがリーダーシップをとることが必要とされ、主体的にかかわらなければならない。庚申庵の活動は、学生たちの主体的な働きがなければ実現しなかったものであり、地域協働の先進的活動を推進した彼女たちのしなやかさとしたたかさに拍手を送りたい。そして、彼女たちの活動を支え、力を貸してくださる多くの地域の人々の存在に感謝したい。

庚申庵の20年の歩みを振り返って、地域の中で学びその成果を地域に還元し、ともに継承していくこと、それが地域にある大学の大きな使命であることを改めて感じるものである。

建学の精神の歴史的過程と位置づけを振り返る

The reflection on the historical processes and positioning on the “Founding Spirit”

高木 総平

Sohei TAKAKI

(中部学院大学教授、松山東雲女子大学元教授)

松山東雲女子大学創立 30 周年に当たり、初めにその「原点」に触れ、そして筆者が在任した 12 年間のキリスト教教育の一端を振り返ることで、その建学の精神のあり方を確認したい。筆者は、松山東雲中学・高校に 10 年間（内 6 年間は宗教主事）勤めた後、1998 年新設の女子大学人間心理学科所属として学内異動をした。その後心理子ども学科に改組されるまで、大学の宗教主事を 10 年務めた。その間、本学の原点である創立者二宮邦次郎の歩みについて、彼が生まれ育った備中松山、明治以後は備中高梁の歴史、その精神性について、日本基督教団高梁教会牧師八木橋康広とともに 3 回にわたり本学紀要に投稿した¹⁾。

そこからまず創立者二宮邦次郎に関して簡単にまとめてみる。二宮は『松山東雲学園百年史 通史編』²⁾によると備中高梁における自由民権運動の指導者のひとりであった。その自由民権運動の目標は、当時の薩長藩閥の権力独占という理不尽に抗議し、国民の間に自由な言論を起こし、その運動の中から国民の代表を選挙で選んで、その代表者の集まりである国会を開設して、国会での話し合いで憲法や国の政治のあり方を決める³⁾というものであった。それとともに、二宮は、博物学を学ぶに及んで、「宇宙間には造物主が存在しないはずがない、この造物主こそ天地の主宰者、唯一の神である」という信念を強くするに至った⁴⁾のである。これは聖書の説く神であり、目に見えない自由や真理であり、見える自由や真理⁵⁾を追究していた自由民権運動とともに、その根底には「至誠惻怛」（しせいそくだつ）があった⁶⁾のである。

その二宮の人生を決定づける出来事が生じた。それは 1880 年（明治 13 年）2 月 17 日から 4 日間この地を訪れた新島襄の伝道であった。この伝道説教を要約したもの⁷⁾を紹介する。「人は天地万物と人間を創造した神の意志を知り、恐れ敬い、それに従うことによってはじめて、金や権力・名誉などこの世の力の奴隷になることから解放されて真理と自由を得て、しかもその自由を自分のわがままのためではなく他人や世の中のために使い、それに生き甲斐を感じるようになることが出来る。そういった神への信仰を持つことによって自由と真理と愛に満たされた市民が人を育てる教育に携わることによって、はじめて国は本当の意味で強くなり豊かになり、より高いレベルの状態、すなわち文明開化が出来る。とりわけ、日本においては、一刻も早く女性にそのような教育が

施されなければならない。なぜなら封建時代には女性が男性と同じ教育を受けて、一人の人間として自分の良心と責任に従って自立するなどという考え自体がなく、女性は一生の間『家』に従属した奴隷のように考えられていたからだ。それは文明開化の明治になってもほとんど変わらない。このような『奴隷のように自主性のない女性』ばかりが将来の日本人を生み育てるとしたならば、それは日本の文明化に大きな障害となってしまう。しかし、政府は様々な理由から女子教育には本腰を入れようとはしない。そこでキリスト教の信仰を基とする女子の教育、とりわけ、政府には本気でやる気もそのノウハウもない女子の中等以上の教育を立ち上げることが日本のキリスト者の急務である。」これに感激した二宮は、小学校教師も政治家になる希望も投げ捨て、牧師そしてキリスト教信仰に基づく教育者になることを決意し、一途にその決意を守り続けたのであった⁸⁾。

この新島との出会い、二宮の決意が本学の原点である。ここから先達たちの幾多の苦労の後、五訓⁹⁾として「高遠なる理想」「敬虔なる信仰」「真摯なる努力」「清純なる愛情」「私心なき奉仕」にまとめられ、中学・高校で継承されている。そして中学・高校、短期大学、大学では、「信仰・希望・愛」(新約聖書 コリントの信徒への手紙一 13章)がスクールモットーであり、それは三つ葉のクローバーの校章、学章としてシンボル化されている。

キリスト教主義大学において重要、不可欠なのはこの「建学の精神」をどう具現化するかということである。ここで、筆者が在職した1998年から2011年の12年間の内10年間の『寒梅』¹⁰⁾における主張の要点を確認することにより、当時キリスト教教育の責任を負っている当時の大学学長、短大学長、中学・高校校長、各宗教主事¹¹⁾がどのような思いを持っていたかを確認し、その具現化を考える契機としたい。

上記の執筆者延べ43人の投稿から以下のようなテーマでまとめた。当然複数のテーマで語られたことも多く、一つの投稿に2～3のテーマがある場合もある。厳密に区分けできない場合もあるが、あえて以下のように分類し、その回数も記す。①建学の精神 15 ②神、キリスト 10 ③多文化共生、異文化理解 8 ④キリスト教教育 7 ⑤平和 5 ⑥ボランティア(被災地支援) 3 ⑦カルト問題 3 ⑧一人一人が大切な存在 2 ⑨環境問題 2 ⑩愛、献身 2 ⑪教会 2 ⑫この社会への疑問 2 ⑬救い、弱さ貧しさ、ジェンダー論、死、人生 各1回 このようにまとめてみて気づいたことがある。私が記憶する限り、チャペルにおいてもほぼこのようなテーマで、奨励がなされていたのである。このような項目に表れている課題にどう取り組んでいくか、それが建学の精神の具現化の方向である。普段学内においても平和、人権、国際理解、女性の自立ということが絶えず意識され、それらを根底に様々な活動がなされていたのである。現在もそれは継承されていると推察する。そういう意味において、建学の精神の具現化の動きは継承されてきたと考えられるが、学生の魂まではそのメッセージが届いていない¹²⁾との指摘は重い。それをどう発信しているか、今も問われている。新島が嘆いた¹³⁾ 現実、金や物のとりこになっている現実は今も変わらない。そこに綻びも生じているが、物の豊かさを求める合理性ゆえに人が大切にされない社会のあり方はますますひどくなり、その隙間にカルト団体が入り込んでいる。そしてコロナ禍でより明確になった

のが、同調圧力に抗しえない自立できていない日本人の姿である。そのような社会のしわ寄せは女性をはじめ子どもたち等に及び、女性が不利になる制度や習慣はまだまだ続いている。

そのような現代において、一人一人が神の前に尊重され、謙虚でしかも自立した人間として、この社会や世界の問題と向き合える学生を育てる責務があり、それは社会から今後より期待されていくと思われる。それが本学がキリスト教主義の女子大学として存在する意義である。

注

- 1) 高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境』
-新島襄書簡から読み解く備中松山の幕末維新- (2005) 松山東雲女子大学紀要第13巻
高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境2』
-備中松山の栄光- (2006) 松山東雲女子大学紀要第14巻
高木総平・八木橋康広『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境3』
-邦次郎回心への道のり- (2010) 松山東雲女子大学紀要第18巻
- 2) 松山東雲学園百年史編纂委員会編『松山東雲学園百年史 通史編』(1994) 35p
- 3) 前掲書『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境3』49p
- 4) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』35p
- 5) 前掲書『二宮邦次郎の故郷・備中松山の精神的環境3』50p
- 6) 天に対して誠意を尽くし、隣人に対しては慈愛の精神をもって接する。江戸末期から培われてきた松山藩における陽明学に基づいた高い精神性がある。
- 7) 現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』(2000) 149p-150p
- 8) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』35p-36p
- 9) 前掲書『松山東雲学園百年史 通史編』543p-544p
五訓は戦時下1943年にまとめられたもので、当時は「敬虔なる信念」「真剣なる努力」であったが、戦後今のように書き改められ、建学の精神の実践に資することになった。
- 10) 23号2001年から32号2010年までに目を通し確認した。ただし24号のみが欠落している。
- 11) 本稿は大学のものであるが、建学の精神は創立以来継承されてきた、学園全体に関わるものである。ここでは短期大学、中学・高校の関係者も含めている。
- 12) 山崎正幸「実を結ぶために」『寒梅』26号(2004)
- 13) 同志社編『新島襄書簡集』(1954) 131p-132p
明治を迎え「身分社会」から「自由」になったにもかかわらず、備中高梁という地方においても遊郭のけばけばしい灯を目の当たりにして、貪欲とエゴイズムにとらわれている人々の姿を嘆いた。

松山東雲女子大学 30 周年に寄せて — 教育の基本としてのコミュニケーション —

For the 30th Anniversary of Matuyama Shinonome College
What cannot be avoided in education is interpersonal communication

児嶋 雅典

Masanori KOJIMA

(松山東雲女子大学元教授)

1, 岡本道雄先生との出会い

短期大学保育科で教員生活をしていた 1992 年松山東雲女子大学が新設された。初代学長は岡本道雄先生でした。当時、岡本先生はすでにさまざまな方面において重鎮であり、私には近寄りやすい存在でした。

ある日、その先生から研究室に電話があり、学長室に伺いました。岡本先生と私は教育哲学会の会員でした。その関係で連絡をいただいたのです。「あなたの原稿を拝見しましたよ」と言われました。それは、私の大学院時代の作品で、イギリスの教育哲学者シェフラー (I. Scheffler) の論稿を紹介したものでした⁽¹⁾。数百人という小さな学会の会員が同じキャンパス内にいると知りバックナンバーを探されたようでした。「翻訳ではあるけれど文章がいい日本語になっていますね」のようなことを言われました。この原稿は作文や論理的思考でも有名な千葉大学の宇佐美寛先生のご指導をいただきながら仕上げたものでした。宇佐美先生は、当時英米で盛んになっていた言語分析的な手法を用いた教育学研究者として大変よく知られていました。当時の教育哲学研究は宇佐美先生によると「横文字を日本語にただけの研究が多すぎる。何のメタ思考もないのは研究ではない」と言われていました。英語の翻訳そのものよりも、それを日本語にして表現する難しさを週に一度、半年ほど丁寧にご指導いただいていた。宇佐美先生のおかげで私は、自分の思いがかなりの精度で言語化されるうれしさを経験してきました。しかし、そのことでなかなか論文を書けなくなったこともあります。自分が使う言葉が無自覚に用いられないからです。

その論評の中で私は、シェフラーの論を引用しながら、日本の教育学研究への提案をしました。それは現実の教育実践や教育研究の中から具体的な問題を見つけることであり、その方法として概念分析を用い、その考え方の前提を明らかにすることです。この姿勢は東雲学園での教員時代はもろん今日まで変わっていません。

2, 具体的な事例を用いた授業の構想

授業は教科書の内容を教えることで終わりではありません。どんな知識も現状の中で生かされなければならないし、また、学生には授業を通して現状を改善する視点を持てるようになってほしいと願っていました。私自身も分かりにくい話をする人は本人も内容を分かっていないのではないかと、分かってほしいと思えば事例を用いるなどもっと努力してほしいと思っていました。ですから授業を担当する側（教員）になって努力したことは、一般論や抽象論で授業を終えないために実践事例を用意することでした。さまざまな事例を多く用意するには東雲の桑原キャンパスでの実習や各種の勉強会、研究会は好都合でした。同時にそれは私自身が保育を理解することにもなりましたし、保育を含めた教育を根本から考えることのできる事例を多く得ることができたように思います。社会では一般的に保育を軽視する傾向がありますが、それは大きな誤りです。教育の基本が保育の中にあるのです。詳細は津守真先生の論稿を読めば明らかです⁽²⁾。

私の授業の内容は、当局が定めたシラバスを守りながらも事例を中心にした内容構成にしています。授業のテーマを決めるとその内容に沿った事例を準備します。なるべく学生にとって身近なものがベターです。自分に置き換えて具体的に考えられるからです。例えば、子ども観に関する内容であれば次のような事例を準備しました。

10月の運動会の参加賞で子どもたちに2～3人掛けのシートが配られた。数日後、隣のクラスはそのシートを用いて外の芝生で弁当を食べた。それを見た実習生が入ったクラスの子どもたちも「ぼくたちもあんなんしたいな」と言った。先生は「いいね、しょうか。じゃ、明日もってきてくれるかな」と伝えた。

さて、翌日のお昼、先生は「みんな、もってきてくれたかな？」と聞いた。すると2人が忘れていた。実習生は自分のことのようにどきどきしながら様子を見ていた。「忘れてので今日はしない」ことになるのを心配していたようだ。ところが先生は「誰か一緒に座ってくれる人いないかな？」と子どもたちに声をかけた。すると、数名の子どもたちが「いいよ、一緒にすわる」「ぼくもいいよ」と応えた。それで無事に楽しいお昼の弁当を終えた。

その日の反省会で先生は次のようにお話しされた。①私は子どもたちをあまり緊張させたくない。忘れ物を注意するよりは幼稚園に喜んできてくれるようにしたい。きつく言えば、忘れないかもしれない。でも忘れてもよいから気楽に園生活を楽しんでほしい。②誰かが忘れることによって友達関係が広がることもある。誰か一緒にすわってくれる？と声をかければ、喜んで手をあげてくれる。そうしたら「ありがとう」と言ってあげたい。そうすると忘れて子も一緒にすわってくれる子もうれしいと思う。③もし、延期したら何人かの子は「おまえのせいで、できなかった」と忘れて子を責めるかもしれない。いじめの芽になる可能性もある。④加えて、忘れて子は別の機会に誰かが忘れてたら、今度は自分が「ぼくが一緒にすわるよ」と言えるのではないかなど。

事例そのものは簡単な内容ですが、この事例から考える子ども観や教育観の内容は深いものがあります。保育者はもちろん教師にとっても重要なはずですが、これは、私が保育者養成に長くとどまった理由なのです。そうです、すべての教師は保育者なのです。

3. 学生とのコミュニケーション

私が子ども専攻において重視してきたことは学生とのコミュニケーションでした。保育が子どもとのコミュニケーションであるのと同じように保育者養成でもそうしたかったのです。毎日の大学生活の中で世間話を含めたコミュニケーションを実践しようと思ったのは、基本的に保育の考え方があったからです。一緒に話をしたり遊ぶのはもちろんですが、一緒に散歩に出たり、絵本を読んだり、歌ったり、ゲームをするのもコミュニケーションなのです。保育や教育には相手がいるのですから、相手の置かれている状況に配慮しながら近づき過ぎず離れ過ぎずしなければなりません。相手のペースを乱してはいけません。

それには場所が必要です。その一つとして実習助手の職員が常勤し、学生と教員がいつでも出入りできる部屋を用意したいと思いました。その要望に当時の棟方学長は快く同意され、陽当たりのよい部屋を提供してくださいました。共同研究室という名前になっていますが、自由にできる休憩室でもくつろぎの部屋でもよかったです。キャンディを置くなど学生が集れるようにいろいろ工夫もしました。座布団や座椅子を持ち込んだ学生もいました。そこで世間話はもちろん実習や学生会、行事の準備などを進めるのです。

そのことが学生の自主的な活動を促すであろうと思いましたし、また教員のいろいろな姿を知ることによって授業への参加の仕方も変わってくると考えたのです。実際、以前よりは講義を聞いてくれるようになりましたし、反応もあり授業を進めやすくなりました。授業をより効果的にするには授業の前に学生とのよい関係が必要だということです。非常勤の先生はその時だけしかかわられないのですが、常勤は毎日かわれるのです。その利点を最大限生かして授業の構想をしたかったのです。

振り返ってみると、岡本先生とのお話の中に私の子ども専攻での実践が準備されていたように思います。これから先も愛媛県にとって松山東雲女子大学は必要な大学です。かかわった教員の一人として応援し続けております。

註

- (1) 児嶋雅典 「教育哲学—いくつかの最近の業績—I. シェフラーによる論評の紹介」日本教育哲学会編『教育哲学研究第44号』1891
- (2) 津守真 津守先生は、「教師はもともと人間を育てる保育者である。現代、ことさらにこのように同義語を反復せねばならないのは、教師という役割にはまり込むと、保育者としての人間のかかわりを忘れるからであろう」と書いています。令和になってさらにいじめの問題が深刻になっているのもこの「保育者としての人間のかかわりを忘れた」結果であろうと思う。「教師像の再構築」（岩波講座8 岩波書店 1998）

無限の可能性を持つ女子高等教育： 更なる「たおやかさ」を拓くために

Female higher education with unlimited potentials

若林良和

Yoshikazu WAKABAYASHI

(愛媛大学理事・副学長、社会連携推進機構長、松山東雲女子大学元教員)

まず、松山東雲女子大学創立 30 周年、おめでとうございます。創立当初に教鞭をとった教員の一人として、重ねて祝意を申し上げます。その記念として特別寄稿の依頼をいただきましたので、投稿することにいたしました。

冒頭から私事で恐縮ですが、私も定年が近づき、書籍や書類の整理を始めていたところ、松山東雲女子大学（以下、女子大学と略す）の『授業概要 1995 年版』の中から、当時の名刺が何枚か出てきました。その右上に貼られたシールには、「たおやかさを育む」というキャッチコピーが付いていました。私は女子大学設置のための教員として赴任し、開設当初の 5 年間（1992～1996 年）と短期間に限られますが、この言葉を大切に女子高等教育に取り組みました。

この「たおやかさ」には、様々な意味がありますが、私としては、態度や行動がしっかりしている上に、やさしくて、そして、おだやかであると解釈しました。女子大学では、これを醸成する最大の教育手法として、私はフィールドワーク（実地調査）とゼミ（人間文化演習）と位置付けて取り組みました。私のライフワークであるカツオ産業文化研究を手掛けるなかで、当時のメインフィールドの一つであった沖縄県伊良部島へゼミの学生さんを引率し、島でのホームステイをもとにしたゼミ活動と卒論指導に取り組みました。端的な表現をすれば、「人との出会い・ふれあいを出発点に、感性と体験を起点にして学問の世界へ誘う」ということでしょうか。（具体的な実践は以下の文献を参照ください。（1）若林良和「フィールドワークは楽し～沖縄・伊良部島体験から～」『えひめ雑誌』10-3、1997 年 3 月、愛媛新聞社。（2）若林良和ら『マル



【写真】当時の若林ゼミ卒業論文集
『がくむにー』第1～3号
（撮影：西村浩子）

チメディアでフィールドワーク』2002年、有斐閣。(3)若林良和『カツオと日本社会』2009年、筑波書房。なお、このフィールドワークをきっかけに、伊良部島の町役場に就職し、島の男性と結婚し幸せな家庭を築いている学生さんもいます。)

ナイスミディとなった彼女らの多くと私の間で、LINEやMail、年賀状、盆暮れの届け物などの交流が現在も続いています。そして、私は、本稿の執筆にあたり、せっかくの機会だと思い、彼女らに約25年ぶりのレポート(?)提出を依頼しました。その内容は、「女子大学で得たものと現在の私」と題し、当時の思い出、今の仕事や暮らしぶりに関することです。彼女らの多くが快く書き綴ってくれました。それを読むにつけて、私は女子大学で教鞭をとったことに深い感慨を覚え、感謝と誇りの念を持ちました。その内容の要約を紹介しながら、私なりに女子高等教育の可能性について考えてみたいと思います。(なお、以下のコメント「」の後のイニシャルは氏名(旧姓)です。)

まず、大学全体に関するコメントとして、「コンパクトな大学で教職員と学生の距離が近く、様々なコミュニケーションをとることができた」(T.K.)、「教員の研究室でお茶をするなどサロンができ、アットホームな雰囲気、和気あいあいとした人間関係が築けた」(S.M.)、「小規模な大学で、学生と教職員との垣根も低く、楽しい学生生活だった」(K.A.)がありました。

次に、沖縄でのフィールドワークに関しては、「島でのフィールドワークは私の人生の宝物。初対面の人との会話のコツを体得した」(S.Y.)、「今、考えても、あのような濃いフィールドワークはなかなか体験できないだろうし、私の人生にインパクトがあった」(K.A.)、「やはり、フィールドワークが一番。人とつながることの大切さや難しさを学んだし、今も島の人たちと交流がある」(K.N.)、「フィールドワークは、それまでの私の人見知りや内向的な性格を変えた、今も思う。コミュニケーション能力のアップの極みだ」(W.H.)というコメントでした。

それから、ゼミ活動のコメントは、「ゼミで一緒に学んだ仲間や先輩、教員との出会いが最高で、しばらく会ってなくても、いつも昔と同じ感覚と関係でいられるのが最高だ」(N.Y.)、「ゼミ活動は、私の受けた教育のなかで、個性やオリジナリティを尊重してもらえた最初の場所であった。今でも、自分の考えを否定せず、他者との折り合いをつけた生き方ができるようになって良かった」(K.A.)、「自分軸を持ち、自責の生き方を育むことができた」(S.Y.)でした。

最後に、改めて再考させられた重要なコメントとして、「今、ライターの仕事をしているが、その基本は学生の時の卒論指導で、それが今も役立っていて、さらなるブラッシュアップに向けて学び直したい」(S.Y.)、「子育てを試行錯誤しながら、子供はキリスト教系の幼稚園に入園した。キリスト教など宗教について再度、学ぶ機会が必要だと感じている」(N.Y.)、「人とのつながりの重要性を、子供たちに言葉以外の方法で伝えていきたいと思っている。これからの人生においても、常に、学びの姿勢を大切にしたい」(T.K.)がありました。

こうした一連のコメントは、あくまで事例的なものに過ぎませんが、人間力の向上促進、そして、学び直しの機会提供という、女子高等教育に関する2つのポイントが浮かび上がってくると思いま

す。まず、適正規模による良好な教育学習環境、そして、人間の五感をもとにしたフィールドワークの醍醐味、きめ細かな人間関係を活かしたゼミ活動など、女子高等教育における人間力涵養の真骨頂がここにもあるといえるでしょう。それから、いくつものライフステージを経過した女性には、これまでの生活体験とキャリア形成を踏まえた、新たな学び直しの機会提供も女子高等教育の一環に資するものとして不可欠だと思います。

言うまでもなく、ジェンダーフリーを前提にして、女子高等教育は人間教育にも通底するほか、ドラスティックに変動する現代社会において、宗教的な情操性と学問的な科学性を基盤とした取組は極めて重要だと思います。松山東雲学園では、県内においてオンリーワンの女子高等教育が綿々と伝承されています。そのこと自体が、最も尊ばれるべきことであり、さらに、今後も大きな発展の可能性を持つものと、元教員として、また、同じ愛媛県内の大学役員としても考えています。

人生 100 年時代を迎え、働き方改革が推進される日本社会では、リカレント教育やリスキリングの重要性は益々、増大していくでしょう。女子大学においても、これまでの教育実践を踏まえ、社会人対象の教育プログラムや講座は、私が在職していた頃から継続的に展開されており、改めて敬意を表します。女子高等教育機関として、同窓生をはじめ地域の女性ステークホルダーに対して、更なる「たおやかさ」を拓くための多面的な取組を期待したいと思います。松山東雲学園の歴史と伝統に培われた強みや特徴を活かした女子高等教育に、私は無限の可能性を信じています。今後、愛媛県における女子高等教育のパイオニアとして、女子大学をはじめとする松山東雲学園には、より一層の飛翔を祈念します。

「松山東雲女子大学日本語教師養成プログラム」を振り返って

Reflections on the Matsuyama Shinonome Women's College
Japanese Language Teacher Training Program

向井 留実子

Rumiko MUKAI

(松山東雲女子大学元助教授)

松山東雲女子大学では、1996年度に「日本語教師養成プログラム」（以下、「プログラム」）を開講し、日本語教育の知識を持つ人材を世に送り出してきた。「プログラム」の閉講となった2012年度までの16年間の修了生は149人となっている。筆者は「プログラム」開講の1996年度から非常勤講師として、1998年度からは常勤教員として2003年9月まで「プログラム」に関わった。本稿では、その間の試行錯誤を振り返りつつ、「プログラム」の存在した意義を述べたい。

「プログラム」は、日本語教育の知識が、生涯教育の立場からも、将来を見据えた女子教育の立場からも有意義であるとの判断から⁽¹⁾、「母語である日本語や日本文化への理解を深め、国際的・多角的視野を広げる教育の一環として開設」されることになった⁽²⁾。その内容は、「外国人の日本語学習を支援する人材」を育成することを目標とし、1985年に文部省が示した「日本語教員養成のための標準的な教育内容」のガイドラインに従って、規定の科目に本学独自の科目を加えた33単位を最低修得単位とする副専攻レベルのプログラムとして、西村浩子講師（現教授）により立案された⁽²⁾。

日本語教師を養成する機関にとって最も悩ましいのは教育実習である。日本語教育における教育実習は、教職課程における小中学校等での実習と違い、外国人を対象とするため、日本語教育を行っている機関・教室は限られ、教壇実習の機会まで提供してくれる受け入れ先を見つけることは、とりわけ外国人自体が少ない地方においては不可能に近い。「日本語教員養成のための標準的な教育内容」でも教育実習の実施は養成機関に委ねられおり、大学によっては、実習先の確保が難しいために科目を設置しないところもあった。しかし、「プログラム」では実習経験を重視する立場を取り、科目として設けられることになった。

1996年度から開始した「プログラム」で、筆者が担当したのは、核となる「日本語教育概論」「日本語の文法」「日本語教育法Ⅰ」「日本語教育法Ⅱ」「日本語教育実習」（以下、「日本語教育実習」の科目名の場合は「実習」とする）であった。その中で、前・後期の両方で行う「実習」は上述し

たような事情があり、毎回は試行錯誤であった。そこで、以下では、筆者が在職した6年半で、とりわけ心に残った1996年度、1998年度、2002年度の「実習」の「舞台裏」を振り返りたい。

1996年度は、「プログラム」としても、筆者にとっても初めての「実習」だった。ちょうど当時、本学にアメリカのステイブンス大学から短期留学生を受け入れるプログラムがあり、その中の1コマを実習に当ててもらうことができた。日本語がほとんど話せない留学生3人に対し、挨拶・自己紹介など、ごく簡単なことを教えるものであったが、留学生からはかなり辛口のコメントを受ける結果となった。当時筆者が非常勤で、時間外の指導が十分に行えなかったため、実習生が知識・スキルを身につけることができなかつたことが大きな原因だった。しかし、初回に大きく失敗したお陰で、教壇実習で求められる知識・スキルが具体的にイメージできるようになり、「プログラム」開始段階で核科目の内容を「実習」に合うように調整することができた。

その後「実習」では、地域の外国人に謝金を支払い、仮のクラスを作って教壇実習をするようになった。謝金によって、当日外国人が現れないというリスクが回避され、初回のような実習生の知識・スキル不足による問題も生じにくくなることを見込んだものだった。地域の限られた外国人の中から探すため、レベルを統一できないことも多かったが、毎回、留学生向けの初級教科書を使って実習をしていた。1998年度の実習もまさにそんな中で行われた。授業が始まって10分もたたないころ、一人の外国人が突然怒り出し、部屋を飛び出して行った。慌てて追いかけて理由を聞くと、「自分は短期滞在するミュージシャンで、日本語を学びたくて来たが、期待した内容でなかった。貴重な時間をこんな授業に使いたくない。お金はいらないので、帰る」ということであった。この経験は、たとえ仮のクラスであっても、目の前の学習者に合う内容で実習を行う重要性に気づかされる機会となった。

このような教壇実習の場づくりの苦労は、2001年度から本学でも正規留学生の受け入れが始まり、外国人が学内で確保できるようになると、大きく変化した。2002年度の「実習」は、10月入学の留学生に対して9月に行う入学前日本語・日本文化集中講座全体を担当する形を取った。指導経験のない者が、入門の日本語を教えることはかなりハードルが高いのであるが、この講座は日本語力の高い留学生を対象としており、扱う内容も、アルバイトの情報収集のしかたや、交通機関の利用のしかた、町の案内、若者ことばなど身近なもので、日本語指導の知識が十分でない実習生でも担当可能と判断した。この年度の実習生は、仮のクラスで決められた内容を教えるのではなく、実際のクラスのニーズに沿ってコースデザインまで担当して教えることになったため、取り組む姿勢がこれまでとは大きく異なっていた。実習後の留学生へのアンケートでは、実習生への評価は高く、入学前に実用的なことが学べて、互いに交流ができる形は好評であった⁽³⁾。この年の「実習」は、日本語をどう教えるかという狭義の日本語教育の場面より、チームワークやコースデザイン、学習者との寄り添い方を考える場面が多かったことから、実習生にとっては広義の日本語教育を経験する形になっていたと言える。

近年、在住外国人の急増を受け、多文化共生に資する日本語教育の必要性が叫ばれている。それ

は、狭義の日本語教育から広義の日本語教育への転換が求められていると言い換えることができるが、図らずも筆者の「実習」での試行錯誤は、その転換を進めていくものとなっていた。

このように「プログラム」の形づくりの中で筆者も成長したが、実習生たちも、失敗を繰り返しながら日本語や多文化に向き合う中で成長していった⁽⁴⁾。そうして育った修了生には、国内外の日本語学校で教師になった人も多く、中には働きながら国内の大学院、あるいは海外の大学院に進学した人もいる。また、日本語教師を経て小学校教員、あるいは地域コーディネーターになった人、母国で日本語教師になった留学生もいて、国内だけでなく世界で活躍している。これらの修了生たちは今や中堅として、各地の日本語教育、多文化共生推進を支える人材となっており、その意味で「プログラム」が開講されていた意義は大きい。

閉講してからはや10年が経過したが、この間に在住外国人の急増で社会は大きく変わり、2019年に施行された「日本語教育の推進に関する法律」で、日本語教育の推進が国、地方公共団体、事業主の責務となった。新たな国家資格「登録日本語教員」を創設する法案が閣議決定され、国会で成立すれば、2024年4月から施行される見通しとなっている。このように、日本語教師の需要がますます高まる中、それを供給できなはずの「プログラム」がなくなったことの影響は計り知れないだろう。近年は、日本語教師といっても、児童生徒、就業者、留学生、生活者といった指導対象ごとに専門性が求められるようになってきている。筆者としては、それに応えられる人材を育成できる新たなプログラム創設を願うばかりである。

注

- (1) 西村浩子 (1995) 「『日本語教師養成プログラム』に関する基礎調査報告」『松山東雲女子大学人文学部紀要』3, pp.151-162 : p.158
- (2) 西村浩子 (1997) 「日本語教師養成プログラムの現状と課題」『松山東雲女子大学人文学部紀要』5, pp.205-211 : p.205
- (3) 向井留実子・松井忍・西村浩子 (2003) 「留学生支援としての入学前日本語・日本文化集中講座の実施報告と今後の可能性」『松山東雲女子大学人文学部紀要』11, pp.173-185
- (4) 「プログラム」は筆者が退いたのち、新矢麻紀子氏 (現大阪産業大学教授)、古賀美千留氏 (元本学講師)、西村浩子氏 (本学教授) に引き継がれ、充実化が進められた。

開学 30 周年を機に思うこと

Thoughts on the occasion of the 30th anniversary of the opening of the university

小 西 敏 雄

Toshio KONISHI

(心理子ども学科子ども専攻)

松山東雲女子大学が開学して 30 年を迎えた。いまから 30 年前の記憶を辿ってみた。

入学式の朝、新しい大学本館の新しい会議室で錚々たる教授陣に出逢った。東雲短大からの移籍教員は 13 名だったと思う。私はその中の 1 名で専任講師として着任した。短大では情報処理関連科目を担当する秘書科専任講師であった。短大から移籍した教員は、他の大学から来た先生方のために雑用をこなしていった。国公立大学を定年されてから来られた大教授は雑用をすることはなかった、と思う。本当によく働いた。しかし、当時の短大の先生方からは「女子大の先生は学生の世話をしない」と批判された。まさに緩衝材的役割だった。開学時から教務部員としてカリキュラムに関わり、2016 年度に教務部長を 4 年務め、翌年やっと教務部から 26 年を経て解放された。

私が短大に着任したのは大学院を修了した直後の 24 歳であった。その時、短大で前学期は『パソコン講座』、後学期は『統計学』の非常勤講師を務めた。翌年 4 月から助手として採用され、2 年後に専任講師になった。その後、短大で 7 年間働いた。東雲短大では、大学でありながら金曜 2 限にはホームルームの時間があり、着任 1 年目からホームルーム担当をした。この時のホーム長の熊田理恵子さんは今年（2022 年 11 月）の大学祭に高校生の娘さんを連れて、大学を見学に来られた。もうすぐ受験だそうで、東雲が候補だった。久々に会えて嬉しかった。ずっとここで頑張っていて良かったと思った。また、卒業生がもうそんな年齢になったのだと思った。当時の担当したクラスは、確か 28 名だったと思う。休みがちな学生も担当し 1 年目から退学手続きを行った。思えば私はまだ 25 歳だった。本当に若かったと思う。

私の専門が数学であったことはある意味でプラスだった。当時の東雲短大では唯一の数学者で、着任当初から当時の植松事務長に大変可愛がっていただいた。時々事務室内の事務長の隣席に座り、数学と哲学のお話をした記憶がある。秘書科で『情報学』を共同で担当し単位認定者であった山上克巳教授は東雲学園の元事務局長で、定年後に教鞭をとられた。この山上先生にも気に入られ、

よく哲学談義を行った。数学はそもそも哲学なので、よく論理的な議論を行い、山上先生に花を持たせていただいた。今から思えば、祖父的存在の方々に本当にお世話になったと感じる。

着任した時は、もちろん最年少教員で皆さん先輩であった。ただパソコンが使える唯一の存在だったので、その点からも重宝された。先輩の宮内秀和先生は私より一回り上の家政科の物理学担当教員で統計学の前任者だった。宮内先生にも大変お世話になった。私は非常勤時代に第1種情報技術者試験に合格していた。数年後宮内先生も同じ試験に合格し、家政科の情報関係の授業をするようになった。

最初に入った研究室は亀岡篤先生と同室であった。今から思えば、あの狭い空間によく2人が居たなと思う。その後、D館が新築されパソコン54台の情報教室が整備された。その5階の情報教室D-5-2、D-5-3の世話番として新しい研究室に移動した。眺めの良く日当たりの良い広い研究室だった。女子大に移籍するまでそこで過ごした。

情報関係を担当していたので図書館員になった。図書館の情報化をすすめ、情報館というブレイクテックのシステムを導入した。これが本学図書館のDXの始まりだった。そして図書館職員として働いていた女性を人生の伴侶とした。31歳になった年だった。そして33歳の年に女子大が開学し、長女が8月に誕生した。

女子大に移籍することが決まり、後任が宇都宮昇平先生だった。一つ年上で物理学出身であった。議論してぶつかったこともあった。しかし彼は私を常に先輩として立ててくれた。多分、不満も多かっただろう。しかし最後は主張を受け止めてくれた。最後、急逝してお別れする直前まで、彼は本当に心の友だった。葬儀では涙が止まらなかった。

初代学長の岡本道雄先生は「シリナガビッチギロンスキー（尻長ビッチ議論好き）」という異名を持つ話好きの方だった。なかなか直接にお話を聞くことができなかったが、亡くなる前の年末の忘年会の2次会で、那須野学科長、石丸学科長とともに若手教員とカラオケバーに連れて行っていただいた。そして、皆の前で谷村新司の『昴』を唄った。

目を閉じて何も見えず……、さらば、昴よ。

松山東雲女子大学という生まれたばかりの名も無い大学に全国から集まってきた教員たちが、世間に声を上げようともがいている姿がまさしく目に浮かんだ。岡本先生はさらに前に向かって歩いて行かれた。そして翌年のお正月明けの朝に他界された。あの『昴』は今でも覚えている。岡本学長は今でも心に生きておられる。

学内ネットワークを構築した前には、当時、本学の図書館長をされていた長谷川孝士教授にお願いして情報環境整備検討部会を設置していただき、内線を使用したダイアルアップPPPを始めた。

研究室の電話が通信中で、電話が繋がらないので学内 LAN が構築の検討が始まった。長谷川先生は「国語の権化」と言われる素晴らしい方で、愛媛の国語教育の中心的な存在の方だった。この先生が東雲女子大におられたので学内 LAN ができたと思う。長谷川先生も本学を退官されたのちに他界された。

その後、2代目の別府恵子学長、そして磯村滋宏学長。私を教務部長にして情報化を進めた棟方信彦学長と出会った。塩崎千枝子学長とは短大時代から入試の作問や、女子大の教務関係で一緒に仕事をさせていただいた。

この30年間にお世話になった先生は大半が亡くなられた。本当にいろいろとお世話になったと思う。皆様にここから感謝したい。目をつぶると、その先生方の思い出が頭を巡る。自分もそんな年齢になったのだなと改めて思う。私もあと少しでここを離れることになる。誰かに覚えていてもらえる存在になれるかなと思う。

マイノリティの子ども・若者の学力保障と進路保障 — イングランドでのフィールドワークに基づいて —

Securing Academic Achievement and Transition for Minority Children and Youth
Based on a fieldwork in England

山口真美・瀬戸麗^{*(1)}・王一瓊^{*(2)}・ハヤシザキカズヒコ^{*(3)}

Manami YAMAGUCHI・Rei SETO・Yiqiong WANG・Kazuhiko HAYASHIZAKI
(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

本稿では、イングランドにおけるマイノリティの子ども・若者の学力保障と進路保障について、事例を通じてその実相を描く。具体的には、ロンドンにある6つの学校、2つのユースワークで行ったフィールドワークの結果を報告する。調査からは、行政関係者、学校関係者、ユースワーカーやチャリティの運営者という子どもをとりまく人々の日々の地道な努力が成果となっていることが伺われた。

キーワード：イングランド、マイノリティ、学力保障、進路保障

[Abstract]

Based on their research visit to 3 boroughs with high levels of deprivation in London, the authors examined methods of securing academic achievement and successful transitions for minority children and youth in England. The authors focus on the supportive systems and practices found in six primary and secondary schools and two charities offering youth services in the boroughs. The authors demonstrate, by describing the staff's day to day efforts to support and help their pupils and youth, that their work is making a clear difference.

keywords: England, Minority, Securing Academic Achievement, Securing Transition

1. はじめに

1. 1. 研究の背景

本稿の目的は、マイノリティの子ども・若者に対するイングランド⁽⁴⁾における学力保障と進路保障について、8つの事例を通じてその実際と課題を描くことである⁽⁵⁾。

「マイノリティと教育」という研究領域は日本では相対的に関心が薄い面があった(志水ら2014)。近年日本で「教育格差」ということばが普及し「生まれ」(出身家庭の社会経済的地位な

どの社会的属性)によって人々が得られる教育達成に差があるという理解がようやく共有されるようになってきた。社会のなかに存在しているマイノリティグループはマジョリティに比して「教育における排除」に遭いやすい。教育における排除とは、教育からの／教育のなかの／労働市場からの排除のアスペクトを持つ(志水 2022)。ここでは想像しやすい狭義の学力に着目して話を進める。学力獲得は進学や就職の有利・不利に結びつく。それゆえ学校では「すべての子どもがもつ、確かな学力を獲得する権利を実現させること」(志水 2020 p.37)つまり学力保障⁽⁶⁾という観点が重要である。その際には家庭や地域にさまざまな課題があり、それらが学校生活での課題として表出する可能性の高いマイノリティグループの保障に焦点が当てられなければならない。また社会システムの一部である学校教育システムは子どもたちをその先の別のシステムに送り出す機能を持っている。学校中退や教育からの早期離脱を防ぎ高校・大学への進学や安定した就労への橋渡しを行う進路保障⁽⁷⁾という観点も重要である。

本稿で取りあげる英国では 20 世紀末頃に社会的排除／包摂の概念が受容され、特に 1997 年から 2010 年にかけての労働党政権下ではマイノリティグループの社会的包摂を目指した政策が採られた。その後の政権交代により保守党(連立)政権下ではそうした潤沢な予算は確保されず、様々なサービス・支援は縮小されているものの、英国の事例から学ぶところは大きいと考えられる。

1. 2. 英国の学校教育とマイノリティグループの現状

ここで英国・イングランドの学校教育に関する一般的な知識と本稿で言及されるマイノリティグループの現状について簡単に共有しておきたい。

イングランドでは 5 歳から初等教育 6 年間、前期中等教育 5 年間となっている。前期中等教育修了時に、中等教育修了一般資格試験(GCSEs)を受ける。その後の進路は継続教育機関(37%)、シックス・フォーム(38%)、シックス・フォーム・カレッジ(11%)、見習い生・就業(7%)等となっている(菊地 2021, 数値は 2017/2018 年度)。この時点で、大学進学に向けて勉強するか、職業専門学校に進学するかに分かれる。大学へと進みたい場合、A レベルと呼ばれる資格試験⁽⁸⁾を受ける。

本稿で念頭に置いているマイノリティとは、低所得者(貧困)層、エスニック・マイノリティ、障害者である。まず低所得者層に関連して英国では貧困研究が盛んになされ「子どもの貧困」についてもいち早く研究が蓄積されそれを反映した政策が実施されてきた。ただし英国の子どもの相対的貧困率は OECD 平均を上回っており、芳しい状況ではない。2020 年 3 月時点で約 430 万人が該当し、これは約 3 人に 1 人の割合である。また 2012 年と比較してその数は約 70 万人増加している。教育現場においては低所得家庭等の理由に該当する場合に受けられる無料学校給食(free school meals: FSM)の制度がある。これを受給している／いたことを一つの指標として、様々な成果における格差の有無が検証されている。また過去 6 年間に FSM の受給対象であることのほかに、社会的養護のもとにある子ども等を含めた不利な状況にある子ども(disadvantaged pupil)という指標が用いられることもある。英国政府によると 2021-2022 年の FSM 児童生徒は 22.5%、約 190 万

人弱に上る (DfE 2022a)。2017-2018年には約13.6%、2020-2021年には約20.8%であったことを鑑みると対象者は増加してきており、コロナ禍の影響がひとつの理由として考えられる。

次に、エスニック・マイノリティについて。ここでいうマイノリティは、ホワイトブリティッシュ以外の背景を持つ場合である。2021年の国勢調査（イングランドとウェールズ）によれば、大まかなエスニシティの割合は、ホワイトが81.7%、ついでアジア系が9.3%、ブラック（4.0%）、ミックス（2.9%）となっている。2011年の国勢調査と比べると、ホワイトブリティッシュは80.5%から減少しており、「その他」のエスニシティに分類される人の数は約33万人から92万人へと増加している (GOV.UK 2022)。全体としてますます多様化が進んでいると言える。学校教育では、単にエスニック・マイノリティであるかではなく、英語を第1言語としない子ども、つまり英語を追加言語とする (English as Additional Language : EAL) 児童生徒が支援の対象である。これは言うまでもなく、英語を教授言語としている公立学校においては英語の習得度が学力獲得に大きな影響を及ぼしているからである。2021-2022年現在、児童生徒の34.5%がエスニック・マイノリティであり、EAL児童生徒は19.5%で、どちらも増加傾向にあるという (DfE 2022a)。

最後に障害のある子どもについて。英国では、障害を学習上の困難と位置付ける特別な教育的ニーズ概念が導入され、特別な教育的ニーズを持つ (special educational needs : SEN) 子ども、もしくはSEND (SEN and Disability) という表現がなされる。特別支援学校も存在するが、一般の学校での包摂も進んでいる。英国教育省 (DfE 2022b) によると、2022年時点でSEN生徒は16.5%、約149万人である。SEN生徒の割合は労働党政権下の2010年頃に20%を超えたあと2016年まで減少傾向にあったが、近年再び微増している。

なお、各学校の各種全国テストの結果、Ofsted (学校査察) の結果、財政情報が政府のウェブサイトにも公開されており、そこから検索ができる (2023年1月現在)。イングランドの場合、たとえばGCSEsについて、その学校と地区 (地方当局) やイングランドの平均点と比較することはもちろん、EAL生徒や不利な状況にある子ども、性別など、生徒の属性ごとの平均点の差も掲載されているため、学校が学力格差の是正に寄与しているかを確認することができる。また、学校情報としてSEN生徒、EAL生徒、不利な状況にある子どもの数も基礎情報として掲載されている。公開性が保たれているが、学校に順位付けをするというよりは、学校がおかれた社会経済的背景を十分に考慮し、通過率 (一定成績以上の割合) を重視する姿勢が貫かれている (ハヤシザキ・岩槻2015)。

最後にコロナ禍の学校教育への影響について述べておきたい。英国では、2020年3月20日から6月、2021年1月から3月の2回の学校閉鎖が行われた。どちらもロックダウンの措置に合わせたものであった。政府主導で学校閉鎖が決定されたのは、学校経営を自律的に行っている英国では前代未聞のことであったという。学校閉鎖以後、児童生徒の学習機会の保障やウェルビーイングの充実に向けて、社会経済的な格差や特別な教育的ニーズがある児童生徒への対応、児童生徒・教職員のメンタルヘルスへの対応が重視され、様々な対策が取られている。この際、社会経済的に不利益

な家庭の児童生徒に着目し、重点的に国から学校への追加予算が配分された（植田 2022）。本稿では、このようなコロナ禍の影響が、マイノリティ性を持つ児童生徒が多くいる実際の学校・支援機関でどのように表れたのか、どのような困難と対応があったのかについても着目していく。

1. 3. 研究の方法と訪問の経緯

英国での調査経験が豊富なハヤシザキを中心に、マイノリティの学力保障や進路保障という研究関心に合致する学校教育機関と若者支援団体に連絡をとった。学校教育を中心としつつも、英国で進路保障に重要な役割を果たしているユースワークの取り組みについても調査することとした。本調査の趣旨に賛同し、調査結果の公表の了承、写真撮影や録音の許可を得られた学校・機関のみが今回の調査対象となった。結果として、コロナ禍の流行による日本からの渡航制限が緩和された9月頃に、初等教育（小学校）3校、前期中等教育（セカンダリースクール）3校、ユースワーク2団体での調査を行うことができた。

	学校・団体名	所在地	訪問日	該当節
初等教育	Tollgate Primary School	ニューハム	2022/9/16	2 節
	Alderwood Primary School	グリニッジ	2022/9/15	3 節
	Haimo Primary School	グリニッジ	2022/9/15	4 節
中等教育	Lister Community School	ニューハム	2022/9/20	5 節
	La Retraite Roman Catholic Girls' School	ランバス	2022/9/14	6 節
	The Elms Academy	ランバス	2022/9/20	7 節
ユースワーク	Streatham Youth and Community Trust	ランバス	2022/9/16	8 節
	Rathbone Society	ランバス	2022/9/20	8 節

図 1.1：調査対象校・団体一覧

図 1.1 の所在地はロンドン特別区の地名であり、ニューハムは、ロンドン東部の行政区で、そのなかのストラットフォードは 2012 年にロンドン・オリンピックの会場となった場所である。少し古いデータではあるがロンドン評議会 HP に掲載されている情報によると、16 歳未満の割合が 26.2% と少し高く、またブラック及びエスニック・マイノリティが 60.4% と大半を占めている。特に、南アジア系（バングラディッシュ）の移民が多く住んでいる。本初子午線が通っていることで知られるグリニッジは、ニューハムからテムズ川を挟んで南側に位置する。ブラック及びエスニック・マイノリティの割合は 41.3% である。そして、ランバスはロンドン中心部近くのテムズ川の南側のエリアであり、ロンドン最大のウォーターloo 駅を有する。人口密度が第 5 位で、ブラック及びエスニック・マイノリティは 37.6% で、ブラックカリビアンやアフリカンが比較的多い。近年、大

規模な住宅地開発が行われている。

以下では、これらの調査校・団体において関係者へのインタビュー、授業や事業の観察、資料収集等のフィールドワークを行った結果をもとに、各学校・団体の取り組みやその課題を記述することによって、イングランドにおけるマイノリティの子ども・若者に対する様々な支援の様相の一端を描き出す。

2. Tollgate Primary School

2. 1. 学校概要

Tollgate Primary School(以下 TPS)はロンドン東部にあるニューハム区に位置している。ニューハム区は人口約 35 万人で「イーストエンド」と呼ばれる移民労働者集住地域の一角にある (Office for National Statistics 2022)。2011 年時点の国勢調査によるとロンドンでも貧困度の高い地域 (子どもの貧困率 37%) で人口の約 70% がエスニック・マイノリティであり、アジア系が 43.5%、ブラックが 19.6% を占めている (Office for National Statistics 2012)。

TPS では 450 名の児童のうち EAL (第一言語が英語でない) 児童は 65% である。バングラデシ (21%) と東欧系ヨーロッパ人 (17%) が最大のエスニック・グループで、ホワイトブリティッシュ、ブラックアフリカンと続く。宗教はムスリムとクリスチャンがそれぞれ約 40%、FSM 児童は 25%、SEND 児童は 14% である。Ofsted の評価は Outstanding であり (Ofsted 2008)、後述するようにコロナ禍の厳しい状況下においても学力保障を維持していることが特徴的である。学校形態としては 2017 年からアカデミー⁽⁹⁾ になったが、現時点では大きな変化が語られることはなかった。国立の自閉症認定校でロンドンでは自閉症のためのトッププロバイダーの一つとして位置づけられる。当日は、エマ・オコナー氏 (校長)、ジュリー・アン・ジェニングス氏 (家庭支援員)、マーティン・スタンリー氏 (SEND 担当者) が応対してくれた。

2. 2. 学力保障の実態

TPS では学力保障の取り組みにおいて “Diminishing the Difference” (差を縮める) ことが重視されている。ただし成績下位の子どもの学力を上げるだけでなく、中・上位の層にもアプローチしている。イングランドで最も貧しい地域の一つでコロナ禍では家族を亡くした児童が大勢おり、ニューハム区の病院の依頼で空き教室に人工呼吸器や医療機器を置いていた時期もあったという。そのような状況下で 2022 年の夏に実施された全国テスト (SATs) では、読み、書き、算数、文法・句読点・スペリングの全てにおいて全国やニューハム区の平均を上回り、TPS の過去成績を概ね維持した。下記に一例として 6 年生 (キーステージ 2) の読み書き算数を合算した成績を示す。

図 2.1 は約 91% の児童が期待される水準の成績を充たしていることを示し、図 2.2 はより高いレベルの成績をおさめる児童が約 34% いることを示している。他にも 6 年生の文法・句読点・スペリングの成績は期待される水準の児童が約 93%，より高いレベルの児童が 60% と成果が見られた。

🏫 RWM - achieved standard

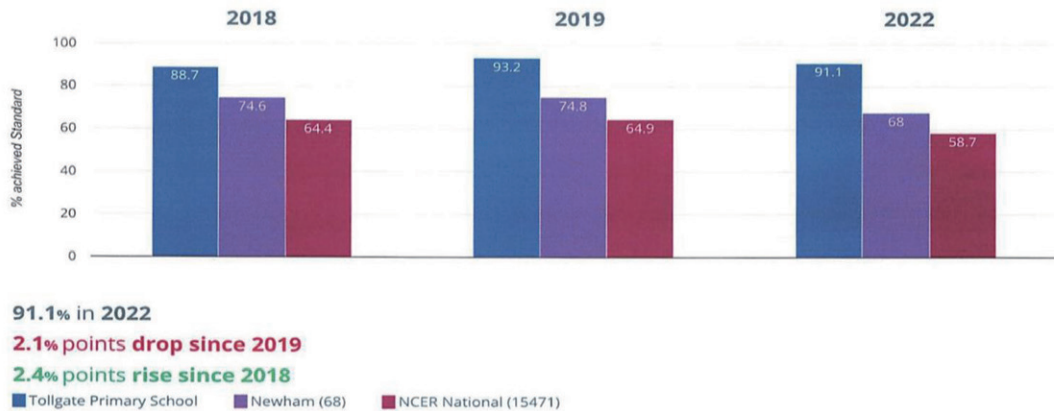


図 2.1：キーステージ 2-RWM の成績（期待される基準を満たした割合）

🏫 RWM - high attainers

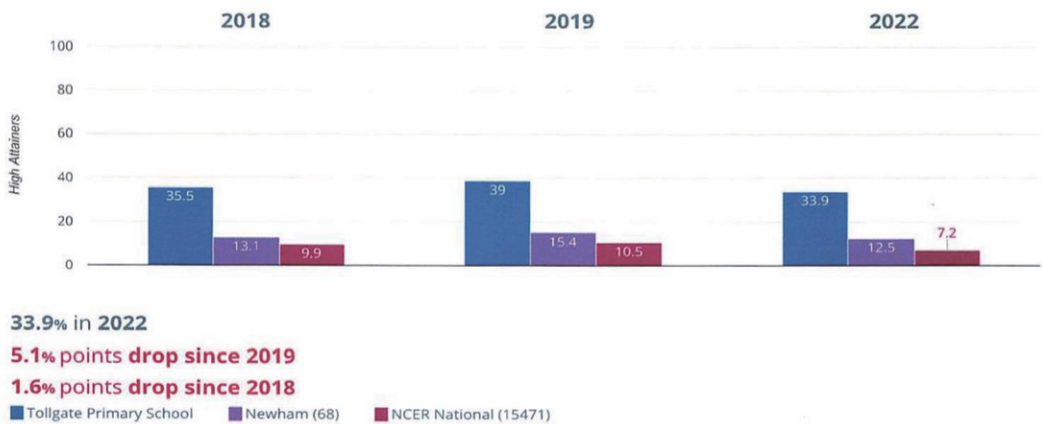


図 2.2：キーステージ 2-RWM の成績（より高いレベルの割合）

特徴的な学力対策としては学習進度の遅れや社会経済的に厳しい背景を持つ「下位 20% の子ども」を意識した教育実践が挙げられる。通常授業では教授内容を分かりやすく伝えるために導入や質問、語彙説明、自主学習時間の確保等の仕方が共有され、児童 1 人に対し 1, 2 人の教師がサポートできる環境が整えられている（Wave 1）。そして授業内容のフォローのため教師や TA 等によ

る介入が行われる。英語・算数・理科の質の高い授業を受けさせる目的から、午前中は通常授業、午後に介入という時間割になる（Wave 2）。さらに指導が必要な場合は、発音、読み、書き、算数といった基礎的学力をつけるために6週間の介入が行われる（Wave 3）。Wave 1～3とは別に、社会的・情緒的なケア（パストラル・ケア）が必要だと判断される場合は会議でそれぞれの子どもにどのような教育支援が必要なのかが議論される。その後、養育、行動、社会的スキルといったプログラムに分かれて各46人のグループで6週間の介入が行われる。以上のような介入は、成績中位層の子どもにも行われるため、たとえば1クラス30人の場合、介入を受ける児童は中位層3名、下位層4名、パストラル・ケア数名がおり、平均クラスの1/3に及ぶ。介入の期間は限定されるため、夏頃までにクラスの2/3が介入を受ける。

ただし、SENDや自閉スペクトラム症の子どもは上記の学力保障の対象となっていないことに留意する必要がある。かれらは年齢ではなく能力に応じて4つのクラス（バンド1～4）に分けられ、10人前後の少人数体制で多い場合は子どもと約同数のサポーターが配属される。TPSでは学習障害専門の教育支援が3年前から行われ、音楽療法、遊戯療法、作業療法、言語療法、感覚統合など専門家による特別カリキュラムでの支援を受けることができる。ただしバンド1の児童を除きかれらはSATsの受験対象者になっていない。

2. 3. コロナ禍以後における教育支援の展開

TPSの児童の親の多くはパブやクラブ、劇場、レストランなどの接客業に従事していたが、コロナ禍の影響下でほとんどが閉鎖され職を失った親もいる。ガスや電気等のエネルギー代が高騰する中で、TPSでは無料昼食や安価な朝食を提供するほか学校をコミュニティのフード・ハブとして位置づけ、食材配布を試みているという。またコロナ禍以後ニューハム区では各学校にメンタルヘルス・スタッフが配置されるようになった。TPSでも同様に配置され、子ども、スタッフ、保護者のウェルビーイングとメンタルヘルスが促進されている。

さらに Tollgate Community Hub が校内に設置された。コロナ禍以前より構想されていたがコロナ禍の影響で2021年9月より遅れてオープンした。ここでは移民の保護者など ESOL（English for Speakers of Other Languages）の人を対象とした英語教室やオンライン安全ワークショップ、低予算で健康的な食事づくりのための料理教室、自閉スペクトラム症の子どもをもつ保護者のための子育て教室、マインドフルネス講座等が開催されている。また無料のコーヒーモーニングの実施は保護者が気軽に学校教員と話せる機会となっている。このような取り組みは、マイノリティ保護者の地域社会からの孤立を予防し社会・学校への参加を促進する、社会教育の役割を果たしていると考えられる。学校は保護者の教育やセーフガード機関等との連携を通してナイフ犯罪や薬物、銃撃等から子どもを守り、コミュニティの安全を確保しようとしているという。

2. 4. 学力保障の広がり と 葛藤

TPS は自校で学力保障の取り組みを進めるだけでなく、近年ロンドン7区にある30校の提携校 (Boleyn Trust Teaching School Alliance) を率いるティーチング・スクールとなり、自校における教育のノウハウを他の学校へと継承する試みを行っている。教授法やリーダーシップ開発を行い、年間30人の小学校教師を養成する取り組みはOfstedでも評価されている。しかし、一方で次のような葛藤も見られる。まずピューピル・プレミアム (児童加配金) の金額が近年大幅に削減されたため、資金繰りが困難である。そしてSENDや自閉スペクトラム症の子どもの学校生活は他の子どもとは交わりにくく、主流な学力保障の対象からも外れていた。特別支援学校でない一般校で障害児教育を行うことは社会的包摂に寄与する一方で、学校内における分断の克服が課題だと言えるだろう。

3. Alderwood Primary School

3.1. Alderwood Primary School の概要

Alderwood Primary School (以下はAlderwoodとする) はグリニッジ区の東南部にあるエルサムに位置しており、2017年に新しく開設された小学校である。児童数が180人程度の小規模校である。2022年のデータによると、AlderwoodのFSMの児童は全校生の55.7%も占めており、イングランドの平均値である22.5% (DfE 2022a) を遥かに超えている。その上に、FSMの基準をギリギリ満たしていないが、生活に苦しんでいる児童がたくさんいる。いわゆる「働く貧困層 (working poor)」が多い (校長談)。また、3人以上の子どもを持っている大家族も多いため、保護者は学校との繋がりが弱い。児童の出席率を改善するために、Alderwoodは児童の家庭への働きかけや支援をも行っている。この点はOfstedにて高く評価されている。AlderwoodはSEND児童への教育支援を積極的に行っている。保護者との繋がりを大切に、定期的な会議、学校のイベントを開催することで、児童の状況をこまめに保護者に伝える実践を行っている。それ以外、Alderwoodはリーディング教育に力を入れているため、児童の読解力が高い。読解能力が比較的低い生徒をしっかりとサポートしている。だが、読解内容が難しく付いていけない児童もいる。Alderwood小学校のOfstedの結果はGoodになっている。

3. 2. 学校側の取り組み

筆者たちの学校における参与観察とインタビュー調査に基づき、Alderwoodで行われた取り組みを、読解教育の徹底、背景を問わないインクルーシブ教育、保護者向けの支援活動の3点で整理した。

前述したように、Alderwoodは、まず、子どもたちの読解教育を徹底的に行っている。フォニッ

クス、ライティング、リーディングといった側面に力を注いでいる。カリキュラムが詳しくデザインされており、保護者と子どもの連動なども強調されている。読解教育に力を入れていることは、学校の廊下で飾られた展示物から読み取れると考えられる。

また、Alderwood はインクルーシブ教育を提供している。SEND 担当者をはじめ、ラーニング・メンター、自閉スペクトラム症専門家、児童早期識字能力トレーナーなど様々な専門家によって包摂チーム (inclusion team) が作られている。

Alderwood では、児童の背景を問わずに、全ての活動やカリキュラムへ参加させる。それ以外、早朝のカフェ時間、放課後のクラブなどにも積極的に参加させるという。

さらに、Alderwood は社会的な不利益に置かれる児童が直面している格差を縮めることを教育の目的の一つとしている。貧困層に置かれる家庭が多いので、Alderwood では保護者むけの生活支援も手厚くされている。たとえば、学校側は冬のエネルギー支援金を提供したり、交通費や燃料費の割引券を提供したりしている。また、学校でフードバンクの商品引換券を受け取ることもできる。さらに、児童の出席率を高めたり遅刻を防いだりするために、Alderwood は早い時間帯に児童向けの朝ごはんを無料で提供している。その中で、特に目立ったのは the Cost of the School Day Project というプロジェクトである。当該するプロジェクトは保護者の経済的負担の減少という目標から発足したものである。具体的には学校のイベントの日では強制的にお金を払うのではなく、任意の寄付形式を採用する。また、エコの名の下で制服をリサイクルする。そして、dress-up day でコスチュームがない児童もいるため、ワークショップを開催し保護者と一緒にコスチュームを作るなど児童や保護者のプライドを傷つけないような形で支援をしている。

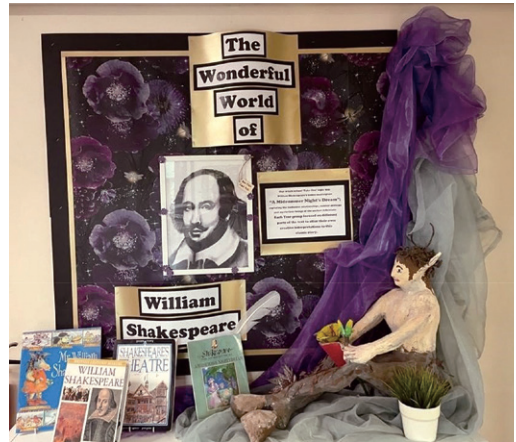


写真 3.1：読書に関する展示物

4. Haimo Primary School

4. 1. Haimo Primary School の概要

Haimo Primary School (以下、Haimo) はロンドン南東部に位置するグリニッジ区のエルサムというところにある。児童数は約 360 名の中規模校である。2022 年度時点で、SEN 児童：72 名 (20%)、EAL 児童：121 名 (34%)、FSM 児童：127 名 (35%) となっており、どの数値もイングランド平均よりも高い。EAL の第一言語の内訳は、ルーマニア語 13 名、アルバニア語 10 名、ブルガリア語・スペイン語・ヨルバ語各 7 名で、その他 26 言語にわたる。Ofsted (2018) では

Good の評価を維持しており、長期欠席者の多さ（イングランド平均 8.7% に対して 13.5%）が懸念事項として指摘されていたが、2018/2019 年度は 8.4%、7.7% と改善し、平均よりも少なくなった。

4. 2. 学校の取り組み

イギリスの小学校らしく、校内の掲示が凝っているという印象をまず受けた。なかでも目を引いたものが、Stonewall（チャリティー）のポスター“Different Families Same Love”である（写真 4.1）。「母＋父」の組み合わせだけではなく、シングルマザーの家庭やステップファミリー、社会的養護のもとで暮らす子、同性カップルの親など、いろいろな場合があるが、いずれもかけがえない家族であり、多様性を重んじているというメッセージが伝わってくる。校長は多文化についても同様だと話した。実際の教員の家族の写真も貼ってあった。また、図書館には新聞紙で作った立体の装飾があり、童話のような世界観であった。これは創作が上手な TA と子どもたちが一緒に作ったそうで、多くの子どもたちのお気に入りとなっている。各教科に関する掲示物もあり、そこには School Curriculum Journey（学年ごとのカリキュラムマップ）も併せて貼ってあり、系統性が意識できるようになっている。包摂的な雰囲気のもと、楽しく、かつ積み重ねを大切に学習することが重要視されているように思われる。

教室は青色（床や椅子）と黄色（壁）を基調とした教室で、電子黒板やホワイトボードを使って授業が行われていた。低学年の教室にはちょっとしたパンと野菜（ミニトマト）があった。あるクラスではフォニックスの授業が行われていた。フォニックスは近年政府主導で取り入れられた英語の読み書きのための学習法である。教員へのインタビューでは、フォニックスは構造的なプログラムになっているため、早いペースでスペリングと発音を身につけることができ、たしかに成果をあげている面があるという。ただし、何人かの子どもたちには合わず、機能しないとも語られた。



写真 4.1：「異なる家族，同じ愛」

Haimo を訪問した理由は、前述の Alderwood と同様に、社会経済的に厳しいグリニッジの学校として、the Cost of the School Day (CPAG⁽¹⁰⁾ のプロジェクト) を受託し、実施していたことが挙げられる。ケイト校長は、the Cost of the School Day プロジェクトを受けたことによる利点を次のように語った。まず、制服等のリサイクル事業をさらに進めることができた。また、CPAG が Haimo の教職員・子ども・保護者へのインタビューをもとに報告書を作成し、それに基づく助言が得られた。さらに、もともとあったアイデアを改善したり、他校とつながって実践を共有できたりした。以上のことを校長として高く評価している。その後、もともとあった朝食クラブを充実させて誰でも朝食をもらえるようにするなどの改革も行われた。

5. Lister Community School

5. 1. 学校概要

Lister Community School (以下、LCS) は2節の TPS と同じニューハム区に位置する。LCS の在籍生徒 1,537 名のうち FSM 生徒は 47.2%、SEND 生徒の割合は 7.6%、EAL 生徒は 56.6% となっている (Office for National Statistics 2020/21)。2021 年からアカデミーになった LCS の Ofsted の評価は、2013 年に Good の評価を得て以降 2018 年も同様の評価を得ている。過去 3 年間の生徒の総合成績が常に全国平均を上回っていること、そして聴覚障害者支援部門があり充実した支援が行われていること等が理由として挙げられている⁽¹¹⁾。最新の GCSEs の結果でも各生徒の学力変化を示す Progress 8 score⁽¹²⁾ が 0.28 ポイント上昇し、英語・数学の標準レベルの達成者が 72%、より高いレベルの達成者が 54% であると示されている (LCS 2022)。人間関係や性と健康に関する教育 (RSHE) が体系立てて行われていることも LCS の特徴の一つである。卒業後はニューハム・シックスフォーム・カレッジやニューハム・カレッジ等に進学する生徒が多い。訪問当日はテッサ・ホール氏 (校長補佐)、サラ・エドワード氏 (生徒支援センター)、ヤスミン・ディラン氏 (学習支援担当) を中心に対応してくれ、生徒支援や学習支援の話を中心に伺った。

5. 2. 学校生活を支える福祉的支援

学校生活を支える福祉的支援の取り組みは大きく 3 点に分かれている。

第一に生徒のウェルビーイングとウェルフェアを支援するためのハウス・チーム制度がある。最上学年を除く全生徒が縦割りの 5 チーム (きょうだいは同じチーム) に分けられる。各チームにはチーム・マネージャーとパストラル・マネージャーが各 1 名配属され、生徒の困りごとへの支援や必要であれば学校内外の専門家との連携が求められている。前者は主に成績表の授与や不登校傾向の生徒の指導や生活指導上の目標設定などを行う。後者は主に行動上の問題や家庭の貧困等に働きかけ、たとえば週 1 回家庭訪問を行ったり遠方に住んでいる生徒の遅延許可証の発行や制服の購入

に問題がある生徒には補助金を出したりする。また最高学年になると受験サポートのための異なる支援が用意され、キャリア・チーム2名を中心になされている。

第二に生徒支援センター（Student Support Center）の働きが挙げられる。社会的、感情的、精神的な課題を抱えた生徒のための場所であり5名のスタッフが配置されている。1度に最大10名の生徒を受け入れ、生徒は授業には参加せず6週間センターにのみ通う（延長の場合もある）。チームメンタリングや保護者との会話を重視しながら学習を継続的に行う。メインストリームに戻しGCSEsの準備をさせることを目標にしているという。

第三に包摂チームの働きが挙げられる。教育ヘルスケア計画（EHCP）の認定を受けた生徒や高機能自閉症やダウン症の生徒が支援対象となり、17名のスタッフのうち聴覚障害の支援者が10名、クラス担任が5名含まれている。支援資金は潤沢ではないため、読解などにおける「介入」を実施しスタッフを増やす代わりにきめ細かな個別支援計画を立てることで、支援の質を担保しているという。医療支援者が教師と連携し医療上のケア、たとえば喘息、血圧、アナフィラキシーへの対応を行うこともある。またメインストリームには入れないが保護者が特別支援学校への通学に反対する生徒や社会情動・メンタルヘルス（SEMH）にニーズがある子どもへの教育支援もこのチーム（Learning Support・SENCO）の役割である。かれらはGCSEsの資格が得られないため、2名の児童保護官を含めたセーフガードチーム、教育心理学者、セラピスト、言語療法士、作業療法士、小児科医と連携しながら個別のカリキュラムを作成している。

5. 3. 小括：学校生活を下支えする個別的支援

LCSでは各生徒がサポーターの大人と個別的な関係を結びやすい学習支援・生活支援体制が構築されていた。人的資源が限られている中で生徒の困難を早期にすくいあげ、他機関との連携のもとで解決し学校生活を持続させようとする工夫がうかがえる。ただし、細分化された個別支援がどのように学力保障とつながるのかについては今回の訪問では分からなかったため今後の課題とした。

6. La Retraite Roman Catholic Girls' School

6. 1. La Retraite Roman Catholic Girls' School の概要

La Retraite Roman Catholic Girls' School（以下、La Retraiteとする）は1880年にフランスの女性教育者によって開校された長い歴史を有する女子校である。セカンダリースクール（前期中等教育相当）とシックス・フォーム（後期中等教育相当）両方を設定している。女子校であるが、シックス・フォームには一部の男子生徒も在籍している。また、当該する学校では信仰と関係なく、全ての生徒を受け入れる方針を持っている。La Retraiteはランベス地域に位置しているが、多くの

生徒はランベス以外の地域に居住している。

La Retraite には、2022 年現在、1,130 名の生徒（11～18 歳の生徒を対象）が在籍している。そのなかで FSM 生徒数は 249 名で、全校生の 29.9%を占めている。2013 年のデータによると、エスニック・マイノリティの生徒の割合が高く、90%も占めている。ブラックアフリカン、ブラックカリビアンとホワイトヨーロッパ系の生徒数が多い。EAL 生徒は全校生の半分以上である。一部の生徒は英語能力が初級レベルである。それにもかかわらず、La Retraite は 2007 年以來、Ofsted の査察結果が outstanding となっている。その中では、セカンダリースクールのパフォーマンスが優れているという。2022 年のデータによると、La Retraite の 82%の生徒は全科目において 4 点以上であり、イングランドの平均値である 73%を 9%上回った。また、シックス・フォームの評価は良好に止まっているが、少しずつ改善されているようだ。近年、La Retraite のシックス・フォームにおいては、T レベル教育に力を入れており、これからの成長が期待される。

6. 2. 学力保障：多岐に渡った充実した生徒支援

La Retraite では、背景を問わずに生徒への支援が手厚く行われている。本節では、フィールド調査結果及び、教職員へのインタビュー調査結果に基づき、La Retraite の支援システムを説明する。

第一に、La Retraite には生徒の安心・安全と深く関わるセーフガーディング・グループが設置されている。当該する支援グループは生徒の学校内外の安全を保障する役割を果たしている。暴力、性暴力によるトラブルの対策や、メンタル、出欠、ヤングケアラーに関係するサポートはセーフガーディング・グループによって提供されている。セーフガーディングとは別のグループであるが、メンタルヘルス・グループも大きな役割を果たしている。親の離婚によるトラウマ、受験のストレスなどといった生徒の心と関係する問題を解消していく。公立学校においては珍しくスクールカウンセラーがフルタイムで働いているため、いつでも相談できる環境が整備されている。この点からいえば、La Retraite の生徒支援が手厚いと見受けられる。また、両グループの支援内容はオーバーラップすることが多い。組織の運営を円滑にするために、毎週月曜日に全教職員は校内のチャペルに集まり会議が行われる。そこで情報がシェアされる。日頃ではメールなど通して各グループは情報が共有されているという。支援担当者によると、生徒の生活は新型コロナウイルス感染の拡大に影響された。コロナの流行状況によって、試験がキャンセルされたり延期されたりして生徒の中にはストレスが溜まっている。また、家に拘束する時間が長かったため、DV が生じてしまったことも多いという。そこで、支援担当者はロックダウンの間では生徒と電話でコミュニケーションをとってきた。支援担当者たちは生徒にとっていつでも話を聞ける存在となっているようだ。

第二に、La Retraite では生徒のニーズに応じた学習支援も行われている。SEND 生徒向けの学習サポートはその一例である。学習サポートのスタッフはブラックアフリカンの方で情熱を持って自らの教育実践を紹介した。専門企業が開発した教材（例えばリーディング介入レッスン）を利用し、SEND 生徒とのかかわりを大切にしながらリテラシー教育を行っている。支援の担い手である

スタッフには明確なキャリアパスがデザインされている。学習サポートアシスタントやハイレベルTA等異なるレベルの職位がある。彼女はこれから教員免許を取りキャリアの道をさらに拓いていきたいと自分の夢を語っていた。

第三に、La Retraite ではEAL生徒への言語教育にも力を入れている。スペイン語、ポルトガル語、フランス語などがMFL (Modern Foreign Language) で教えられている。EAL生徒はルーツ国の言語授業を受け、単位を獲得していると聞いた。だが、気楽に単位が取れるわけではないという生徒の話もあった。南米出身の生徒は、第一言語であるスペイン語の授業を取ったが、南米で使用されるスペイン語は、スペインで使われるスペイン語と異なっており、苦勞したという。また、La Retraite はEAL向けの英語教育に力を入れている。筆者たちは当該する英語の授業を見学した。

EAL生徒向けの英語教育の教室は少し離れた場所に設置されており、一般の教室よりは暗かった。各国の文化的なグッズが教室内に飾られており、異国情緒が溢れている。担当教員によると、教室が静かな場所に設置されていることや光を控えめにすることで、EAL生徒にとって安心できる環境を構築したかったという。教室には7人程度の受講生がいた。生徒たちの自己紹介によると、スペイン、パリ、ポルトガルなど様々な国から渡英したようである。イングランドでの滞在期間も異なり、3ヶ月から5年までである。

EAL生徒の英語の担当教師は何か国の言語を話せる情熱がある方である。英語だけではなくスペイン語も教えているようだ。スペインルーツの生徒に対して、スペイン語で声をかけたりする様子もあった。担当教師によれば、当該する授業は言語能力発達初期段階、いわゆる英語の初心者だけでなく英語がある程度できるようになった生徒にとっても有益である。また、言語そのものに留まらずに各国の文化を教えている言語教育も実践されている。たとえば、EAL生徒を博物館に連れたりロンドン塔まで遠足したりしている。ストレスを発散するためにガーデニングクラブも主催されている。ただし、EAL生徒の背景が異なっており英語能力のレベルもそれぞれであるため、統一したカリキュラムはないようである。担当教師は常に生徒を一人一人見ながら、会話の練習を行っているという。

このように、La Retraite では、生徒の安全・安心の環境の保障から、生徒の各種のニーズに応じる教育まで、多岐に渡った生徒支援が行われている。

6. 3. 進路指導：大学進学と就職の両立支援

La Retraite のシックス・フォームではTレベルに力が入れている。Tレベルはイングランドが2020年から発足した新しい教育コースで、学力を重要視するAレベルより実践的であると言われている。Tレベルは技能職への就職、関連技術が学べる高等教育への進学を目指すため、産業界のニーズが満たせる形でデザインされている。そのため、Tレベルは企業との連携を大切にしている。教室内の授業のみならず実践的な学習が行われており、3ヶ月の職場でのインターンシップも求められている。La Retraite はTレベルが設立当初から当該する教育コースを学校内に導入し、

Tレベルのパイオニアだと誇りが高い。現段階、デジタル・ビジネス、保育、建設、助産、メディア放送と制作、法律サービスといった6つのコースを設定している。

このように、Tレベルを導入したLa Retraiteでは大学進学と就職の両輪で生徒の進路指導が行われている。進学アドバイザーとビジネス・エンゲージメント・オフィサーは大学への出願、経済的支援、面接の指導を行うとともに、産業界への就職、職場体験、ボランティア活動の支援を行っている。La Retraiteの在校生は、Tレベル教育コースについて以下のようにコメントしている。

自分のキャリアについてゆっくり考えることができている。シックス・フォームでTレベルの課程を2年間学んでから、直接に職場に行くか、それとも大学に行くか、両方選択できる。やり直すこともできる。友達は最初、保育だったが、デジタルに変更した。もう一年やらないといけないが、やりたいことを見つけたし、先生たちにもサポートしてもらっているのだから、本人は満足しているようだ。（2022年9月13日 生徒へのインタビュー調査より）

ただし、実際にTレベルの導入は2年前であるため、調査時に卒業生がまだ出ていない。進路保障の効果について追ってさらなる調査が必要である。

7. The Elms Academy

7. 1. 学校の概要

The Elms Academy（以下、Elms）は、ロンドンのやや南部に位置するランベス区のクラップムというところにある。2004年に市立アカデミーの最初のひとつとして開校した。定員は135名で、学校周辺の高級住宅街の子どもたちは他のエリート校に行っているため、通ってくる生徒は少し離れた地域の地元層である。SEN生徒は13.2%、EAL生徒は46%、FSM生徒は56.8%という割合である。ランベス区のなかでProgress 8（2019）の成績がイングランド平均より高く、かつマイノリティ生徒が多いことから選定した。

7. 2. 学力保障：規律を重視し、学習に集中する環境を作る

Elmsの学校の特徴をひとことで表すなら「規律」重視である。日本の生徒指導に力を入れている中学校を思い浮かべてもらうとよい。以下では、訪問日の様子を紹介する。毎朝8:25から、雨の日も校庭でクラスごとに朝礼が行われる（写真7.1）。2列に並んだ生徒たちに対し、各クラス担任がその日の伝達事項を共有し、服装・身だしなみのチェックを行い、忘れ物の申告を受け付ける。その後、各クラスに移動して、8:40からチュータータイムがある。訪問日は学校生活の規律に関する校長の講話がテレビ中継で行われていた。眠そうにしている生徒に対して、先生はぴしゃ

りと「起きなさい」と言う。講話のあと、生徒のふるまい (behavior) ポイントの週間ランキングが発表された。1位の生徒には金券が昼休みに授与されるという。ふるまいポイントは、授業中の態度等が merit もしくは warning として評価され、先生が集計している。

教室には、正面に大きな電子黒板があり、そこをメインに授業が行われる。生徒は2人がけの木製の広めの机に座る。制服の着用方法や礼儀も厳しく定められ、余計なものを持ちこまないよう指導され、ペンケースは透明なものに統一されている。教員の服装はいわゆるオフィスカジュアルが多いが、Behavior (≒生活指導) 担当のジョン副校長



写真 7.1 : Line Up

はジャージ姿である。テオ教頭 (格差是正担当) によると、Elms は若い教員が多く、放課後の補習にも熱心に関わる。また、毎週火曜日の16～18時に職員会議を行うほか、ユニテッド・ラーニングというトラスト (学校群) に所属し、他校とパートナーシップを結んで教員の能力開発にも取り組んでいる。

これらは、不利な背景を持つ生徒が、学習を通して自分自身で将来を変化させるための取り組みである。そのために教師は生徒に対して高い期待を持ち、学習に集中するための支援を惜しまない。7:30～8:15には朝食クラブがあり、早く学校に来れば誰でも朝食を無料でもらうことができる。また、放課後に (試験前の学年は朝にも) 宿題クラブが実施され、家庭で宿題を行えない生徒のために場所が提供されている。さらに、コロナ禍による学校閉鎖時には、各生徒にモバイル PC を譲渡したという。

7. 3. 進路保障：進学を通じて将来を変える

教員のインタビューからは、上で見たような取り組みを通じて学校で学力をつけ、生徒が自分の出自によらず将来を自由に選択できるようにすることが最大の目的とされていることが伺われた。その動きが強まってきたのが、現管理職のエイミー校長・レオン上級校長の体制となった4年前からである。2022年9月にLambeth Academyから名称変更を行い、進学校としてのブランディングを進めようとしている最中である。附属のシックス・フォームの生徒の40%が、イギリスの名門大学群ラッセル・グループの大学に進学していることが学校ホームページに記載され、2021年度にオックスフォード大学とケンブリッジ大学に1名ずつ合格したことが学校の複数個所で喧伝されていた。2020年度のセカンダリー卒業生のうち、継続教育機関に30%、附属のシックス・フォームに53%、シックス・フォーム・カレッジに7%進学している。シックス・フォームへの進学率はイングランド平均が38%であることを鑑みると高い数値だが、今後の学校の課題としてエイミー校長はさらなる成績向上とシックス・フォームへの進学者を増やすことを挙げた。一方、レオン上

級校長は生徒たちの様々な文化的体験の機会（旅行等）を確保することを挙げた。

8. ユースワークのとりくみ

8. 1. ふたつの団体について

ユースワークとはなにか。それは子ども・若者の個人的、文化的、社会的な発達をたすけるためのさまざまな場面でのノンフォーマルまたはインフォーマルな教育プロセスをさす。子どもたちにとってユースワークは学校や家庭につぐ第三の社会であり、そして学校から（ときには家庭からも）排除されがちなマイノリティにとって、それは社会へと参画するためのよりどころでもあり救済でもある。日本の社会教育はよわく局所的にしか存在しないが、イングランドはユースワークの本場であり（あった）労働党政権時代までは地方当局にもユースワーカーがおおくいた。

今回の9月の訪問では2ヶ所のチャリティを訪問しユースワークの現場を見聞した。ひとつめの団体はStreatham Youth and Community Trust（以下SYCT）、もうひとつの団体はRathbone Society（以下RS）という。ともにランベス区を拠点として活動をおこなっており、ともにランベス地方当局の若者むけのプロジェクトである就労支援事業を受託している（ハヤシザキほか2023）。

ひとつめの団体SYCTは1946年にボーイズクラブとして設立された。0歳から24歳までを対象に、さまざまなユースクラブ（ジュニア～シニア、特別支援、朝食クラブ、宿題クラブ、スポーツクラブ）などを運営する。ミッションは「ストリートハムのすべての子どもがその可能性のすべてをひらくこと」である。すでに70年にわたってストリートハムで活動してきたため、世代をこえてコミュニティとふかくつながっているという。

ふたつめの団体のRSは1967年の設立。ダウン症の子どもをもつ親たちによって設立された。設立以来、学習障害の子ども、そして、それ以外の子どもの支援をつづけている。通常のユースクラブ（宿題クラブ、特別支援サービス、夏休みの活動など）のほか、また昼間には高齢者のソーシャルケアサービスも運営している。ミッションは「学習障害のある人々が安全で健康で充実した生活をいとなめるようにすること」である。

8. 2. ユースワークの現場をチラ見！

ふたつの団体の見学記をみじかくしるす。

SYCのオフィスのひとつを訪問し、ジュニアクラブの時間帯にあわせてCEOのアンジーに話をきいた。玄関をあけるとバスケットコートがあり、バスケットをするものたちがいた。コートの外でも子どもたちがはしりまわっていた。別室では絵を描いているものたちもいた。美術室なのだろう。陶芸につかうでかい炉がまず目をひいた。絵の具でカラフルによごれた一枚板の長机も。いいよご

れ具合。おもう存分によごせるよなあ。いまイングランドの小中学校では絵をかいったり体うごかしたりする時間が減少している。経済的にきびしい学校ではあえてそれらに力をいれる学校もあるが、一般的には小学校では英数が、セカンダリーでも GCSEs の科目がより重視される。反対にユースワークではホーリスティック・アプローチという言葉がよくきかれる。

まずアンジーがのべたのは「SYCT の子どもたちは生活がきびしい子がおおい」ということだ。SYCT には「オープンポリシーがあって誰でもうけいれる」のだが、ソーシャルワーカーや学校関係者などの紹介でくる子どもがおおいために、どうしても経済的にきびしかったり家庭環境がきびしかったりする子がおおくなるのだという。

子どもたちがあつまるところにはスタッフがついている。子どもたちはめいめいやりたいことをしているが、スタッフの方は一緒にあそびながら必要なときに子どもをサポートしている。鼻にピアスをつけたタトゥーの若い女性はまだ大学生だという。かっこいい。アンジーに「なぜユースワーカーにはファンキーな外見の人がおおいのか？」とたずねたところ「それがすきなんでしょ」とだけ返事が。ユースワークは自由だ。彼女はイーストロンドン大学の学生とのこと。イーストロンドンのみならず、イギリスの大学ではユースワークを専門に勉強できるコースがありユースワークの修士号 (MA) もとれる。もうひとり青年に声をかけたところスタッフではなくかつてのメンバーだった。子どもの頃から SYCT のユースクラブにかよい、里がえりのさいに SYCT にくるのだという。その姿はスタッフさながらで、子どもたちに自然に注意でき信頼をえているようにみえた。年齢をこえた縦のつながりもユースワークの魅力かもしれない。

ビリヤードのプールがあり、たくさんのボードゲームがあった。ソファにすわると壁一面にはいつかかつての写真が目にはいる。アンジーが「この子がいまここのベテランスタッフで……」とモノクロの写真をさしておしえてくれた。ローマとおもわしき場所の集合写真もあった。イギリスの学校では特別な機会がないかぎり (定期的には) 子どもは旅行やキャンプにつれていかない。宿泊行事を子どもが体験できるのは、ホリデーをたのしめる家庭かユースワークの行事のみである。

もうひとつのチャリティである RS への訪問はほんの短時間となった。RS のオフィスと活動場所は 1888 年建造のオールドライブラリーとよばれる (区の図書館だった) 建物だ。建物にはいると受付窓口と左横にはキッチンカウンターがある。そこではスタッフが若者たちむけのスナック菓子や軽食の準備をしていた。その前にはサッカーゲームのプール。フレンズのチャンドラーの部屋にある棒をくるくるまわすアレだ。入口から右にはラウンジとよばれる部屋。どでかい画面の TV モニターとソファ。楽屋にあるかのようなバルブがたくさん鏡のまわりについた化粧台が 2 台。女子のおきにいりだが芝居やハロウィン用だとのこと。そこにもちいさなキッチンがあるが現在は寄付された食料の箱でうまっていた。食料はコロナ禍で若者や高齢者たちが孤立しコミュニティが減収等してくるしんでいたときに配布や配達をおこなったものだという。

奥には広い空間と卓球台。以前に昼にきたときは高齢者のあつまりがここでおこなわれていた。

ひとりでつまらなそうにしていた子に卓球でもやるかとさそってみる。1ゲームだったが筆者ハヤシザキが接戦で見事に敗退した（写真8.1）。

さらに別の部屋にはなんと録音スタジオが。若者たちがここで作曲や録音や動画作成をするのだそうである。若者のグループがさっそくYouTubeでラップのようなノリのいい音楽を大音量でならしはじめた。



写真8.1：RSで卓球をする若者と筆者

若者たちのなかには「やはり発達障害だろ

う」とおもわれる子たちがおおかった。ユースクラブ責任者のシャーリーンには「かれらにぜひ話しかけてほしい。最初はヨソヨソしいかもしれないけど、みんないい子たちばかり」といわれていた。話をしてみようとちかづくものの、やばい。会話がむずかしい。視線をあわせてくれない。うまく会話できない状態で時間がすぎる。そうだ、ここは高齢のオッサンよりも年齢のちかい女性たちのほうが相手をしてもらえるのではないかと共同研究者たちに視線をむけてみると誰も若者ともスタッフともしゃべりをしていないではないか。そんな若者でもユースワーカーたちはうまくかかわっていく。あそびのリーダーであるかのように、おもしろくすこし高度なことを提案し、ただのダラダラとした時間におわらせない。さすがプロだなとかんじざるをえない。最終日の「つかれ」をいいわけに、うまい会話をひきだせなかった敗北感をもってそそくさとRSをあとにしたのだった。

8.3. ユースワークの政策動向と現場の実態

連立政権になってから地方当局への交付金が削減され、地方当局はすくない予算での運営をしいられている。その犠牲になったのが学校以外の支援サービスである。具体的には、チルドレンセンター、ユースワーク、プレイパークなどのきめこまかな子どもサービス・保護者サービスがそれにあたる。

図8.2のグラフはイングランドの全地方当局におけるユースサービスへの実質的な支出の推移をあらわしている（YMCA 2022, p.4）。2010/11年度から2020/21年度までの10年間で、ユースサービスにつかわれた支出は14.8億ポンドから3.8億ポンドへと減少した。74%もの削減である。とくに連立政権が発足した2011/12年度は27%の削減と最大、保守党政権が誕生した2016年は17%と2番におおきな削減となっている。そのごも数%ずつ段階的な削減がつづいている。

SYCTのCEOであるアンジーはこの困難にどのように対処しているのか。「地方当局からの支出は全体的には削減されている。けれども資金調達にはわたしは成功しているほうだとおもう」とのこと。SYCTの2020/21年度の年間収入は約61万ポンド（≒約1億円）。この額は2016/17年

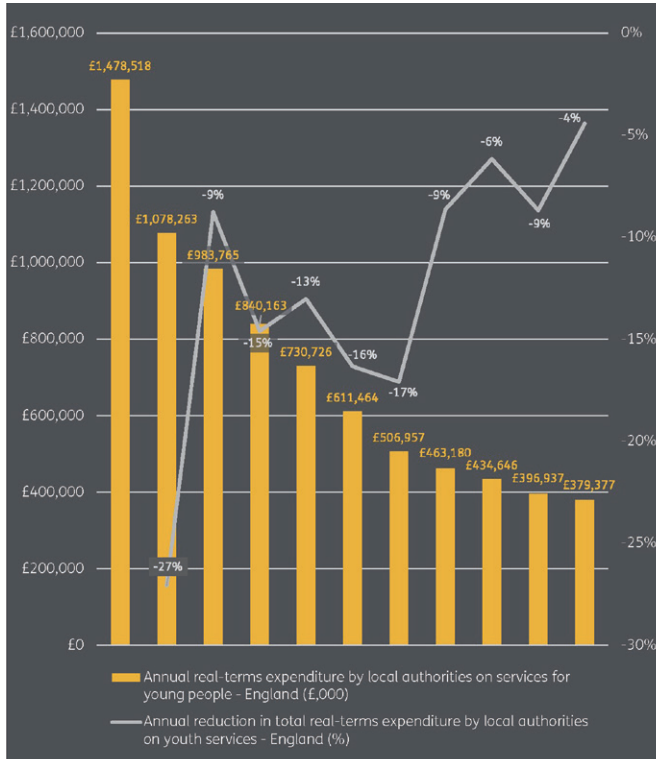


図 8.2：2010/11 年度から 2020/21 年度までの地方当局全体のユースサービスへの支出の推移（YMCA 2022 p.4）

度の約 40 万ポンドよりも 1.5 倍にふえている⁽¹³⁾。アンジーは地方当局や財団の助成金への応募申請に自信を持っている。「書類をかくことがわたしの仕事」「いつも資金の提供先をさがしている」という。また所有のサッカー場をかしだすことや、オフィスの一部の道場をテコンドークラブにも賃貸している。歴史あるチャリティであるだけに不動産資産を有効に活用した自主財源を持っているのだ。

他方で RS のほうは苦境を経験した。2016 年にチャリティは財政危機におちいり約 24 万ポンドの赤字となった。2017 年には 14% の支出削減をしいられスタッフのリストラもおこなっている。しかし現在は高齢者のソーシャルケア事業が主力となり、

行政の事業委託がチャリティの安定財源となっている。2020/21 年度の年間収入は約 209 万ポンド（≒約 3.3 億円）だがそのうち約 130 万ポンドが高齢者ソーシャルケアによるものである。

RS のユースワーカーのスニクからは行政の補助金の削減についてなげく声もきかれた。昔は子どもたちをドイツや南アフリカにもつれていくことができたが、もうそんなことはとてもできない。さみしいと。「けど、障害をもっていたり家庭がきびしかったりする、そんな子どもたちにこそほんとは旅行が必要なんだ」とスニクはのべた。どちらも家族旅行の経験がすくないからなのだという。

YMCA（2022）の報告書によればユースサービスの予算がゼロの地方当局もある。そしてユースワークのみでやってきたチャリティのなかには消滅してしまったところもすくなくない。しかしランバス区のこのふたつのチャリティはいきのこった。行政の支出削減に影響されながらも、しぶとく財源をみいだしていた。

8. 4. ユーワークは変化をうみだせる

ウェブサイトからたどれる SYCT の紹介動画には 2 人のブラックの若者がでてくる⁽¹⁴⁾。「キャラバンで旅行にいったよ。よくおぼえている」「2 人のマークがたすけてくれた。オレはすこし荒

れてたからね。ここにきたら落ちついて、サッカーをしたり、プレーステーションをしたり。それで落ちついたのもあるよ。ただただ楽しかった」「大きい方のマークが自分がこまった時になんでもしてくれた。ユースクラブの外であっても。ポジティブな影響をもらったとおもうよ」「子どもたちはストリートで悪の影響にさらされやすいとおもう。(おなじあそぶのでも)ここはポジティブな道だとおもう。みんな友だちだし、一緒に活動して、べつの地区からも人がきて」

まさにこれである。ふたりのトークはマイノリティの社会的包摂にかかわるユースワークの貢献について明確なケースをみせてくれている。よりそってくれる大人がいるということ。そして仲間がいるということ。この場所にきて遊んでいただけではあるが、ふりかえってみると、ユースワークの効果や意味があったことをかれらはわかっている。

アンジーはSYCT自体に財政的な困難はないとはいえ、政府には不満をもっていた。「政府や社会はソーシャルワークの重要性をもっと認識すべき」だと。社会はユースワークを無視するべきではない。「ユースワークは絶対にちがいをうみだすことができる」のだと。わたしもおおいに同意するところだ。イギリスのユースワークには手本であってほしい。

9. まとめ

9. 1. 訪問先の印象

ここまでおよそ訪問先ごとにインタビューや観察でえられたデータからマイノリティの支援のシステムや實際をまとめてきた。各校ともそれぞれに学力・進路保障についてすぐれた実践をみたが、すくない紙幅でまとめると十全につたえることができなにかんじる。この項では印象にのこった学校、機関についてハヤシザキの観点からひとことつけくわえたい。

まず La Retraite の好印象について。La Retraite にはまる 1 日滞在した。ランベス区とはいえカトリックの女子校とは、お嬢様学校なのではないかともいぶかしたが、そうではなかった。きびしい環境の生徒たちもおおくいて、その手あつくきめこまかい支援についてつぎつぎにスタッフから説明をうけ、圧倒された。セーフガーディングチームやメンターの仕事ぶりがすごく、それぞれが多様な子どもたちのニーズにおおくの専門家やスタッフと協働しておうじていた。校長のリーダーシップについても教員たちがくちぐちにほめちぎっていた。生徒たちが校内を案内してくれたのもかれらのすばらしさをしれた。校長は「学力はじつは重要課題ではない。もっとも大切なのは生徒のウェルビーイング」だという。そのエートスは学校全体に浸透していた。研究代表者の志水宏吉も同行していたが、そこが気に入ったのか「ええ学校やわ」ともらしていた。わたしもそうかんじた。

次に強烈な印象をうけたのが Tollgate である。この小学校はすでにハヤシザキに紹介されているし (ハヤシザキ・岩槻 2015)、当時からチルドレンズセンターを併設し、包括的な子どもや保

護者の支援が素晴らしい学校であった。10年前から生活のきびしい子どもの学力保障に顕著な実績をのこしていたが、今回みせていただいた結果には仰天というほかなかった。瀬戸が先の節でしめした6年生の読み書き算数を合算した数値でいえば、全国の児童が58.7%の通過率であるのにたいし、ニューハム区の児童の通過率は68%であった。さすがニューハム区だとおもうところ、Tollgateの子どもの通過率はなんと91.1%であったのだ。これは期待される水準の点数をとっている児童の割合をしめしている。すなわち平均点がたかいということとはちがう。これこそが学力保障のめざすところだといえる。他の学年ものきなみ同様の学力保障がされていた。しかもEAL児童が65%そしてFSM児童が25%である状況において驚異的というほかない。

印象ついでに街の様子にふれておきたい。ロンドンはいまなお現在も開発がすすみ、かつて貧しかった地域に高層マンションや商業ビルがどんどんと建設されているようだった。こうした開発によって地方当局が財政的にうるおいその資金がランベス区の若者の就労支援にながれていることはすでに指摘されたが（ハヤシザキほか 2023）、街の風景さえかつてとはちがってみえた。かつてのブリクストン駅は物騒ですこしきたなく、しかし乱雑さがたのしい印象があった。まだ昼にあるいたときにはカリビアンのおじさんたちがこっそりヘロインを手わたしているのを目撃してしまったり（ほかの共同研究者は気づいてなかった）、夕方になるとどこからともなくレゲエがながれてきたりしてワケもなくたのしい気分になる。しかしまではキレイに整備されたり、おなじみの量販店やオシャレな店があったりもしてよくもわるくも標準化した街にみえた。ほかの駅周辺でも同様のことをおもった。わたしたちはテムズ川南部のランベス区を調査地の候補としたのはブラック系がおおいからであった。その街がかわっているのを肌でかんじた。

9. 2. コロナ禍後の学力保障のゆくえ

最新の2022年の資格試験の結果がでているので参照しよう。図9.1はメインの6つのエスニシティ別にGCSEsの英数の通過率をみたものである。ここではグレード5以上がその期待される水準となる。さらにFSM生徒とそうでない生徒とをクロスしているものだ。2022年のGCSEsは3年ぶりにペーパー試験が復活した。コロナ禍にあった2020と2021の試験は教員のみとりによるも

	2018/19			2019/20			2020/21			2021/22		
	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外	全体	FSM生徒	FSM以外
アジア	51.9%	37.2%	54.7%	58.3%	43.4%	61.3%	60.6%	45.2%	64.5%	61.3%	46.3%	65.3%
ブラック	37.8%	28.0%	40.7%	46.0%	35.4%	49.5%	48.9%	38.7%	53.1%	49.2%	39.6%	53.8%
中華系	76.3%	69.2%	76.8%	79.6%	72.9%	80.2%	83.8%	79.6%	84.2%	79.9%	69.8%	80.8%
ミックス	43.8%	24.0%	48.8%	50.2%	29.8%	55.8%	51.5%	31.6%	58.3%	49.7%	30.7%	57.2%
ホワイト	42.4%	18.1%	45.8%	49.1%	23.2%	53.4%	50.9%	25.0%	56.2%	47.7%	22.3%	53.6%
その他	43.4%	34.0%	46.5%	50.5%	39.4%	54.5%	53.1%	42.2%	58.1%	51.9%	40.8%	57.8%
無回答	35.1%	22.0%	37.3%	38.2%	26.5%	40.3%	43.0%	29.1%	46.5%	42.0%	28.6%	45.7%
全体	43.2%	22.5%	46.6%	49.9%	27.8%	54.0%	51.90%	29.9%	57.0%	49.6%	28.3%	55.2%

図 9.1：属性別 GCSEs 英数でグレード 5 以上の割合の推移（DfE 2022c より筆者作成）

のだったので、それらとの今年の結果との正確な比較はできないとされている。

そこでコロナ禍以前の2019年と2022年の結果をくらべてみると2022年のほうが全体的に通過率がよくでていることがわかる。これは学力があがったのか試験が簡単になったのかはさだかではない（GCSEsの欠陥とされる）。ただブラックの通過率の上昇傾向には着目してよいだろう。とくにFSM生徒に目をむけたい。2019年のGCSEsでわずか28.0%だったブラックのFSM生徒の通過率は2022年には39.6%となっている。11.6ポイントも上昇しているのだ。他方でホワイトのFSM生徒の通過率は2019年に18.1%だったものが2022年には22.3%と4.2ポイントの上昇にとどまる。

視認性をたかめるために上記の表のうちFSM生徒のみとりだし、そのたと無回答のエスニシティをのぞいたグラフが図9.2となる。人数がすくない中華系がダントツで学力がたかいのだが、ブラックおよびアジア系（おもにインディアンとパキスタンとバングラーディッシ）の劇的な上昇が確認できるだろう。そして全体的にマイノリティとされるエスニシティよりもマジョリティであるホワイトの貧困層があえいでいることもわかる。ホワイト-FSM生徒-男子の学力が

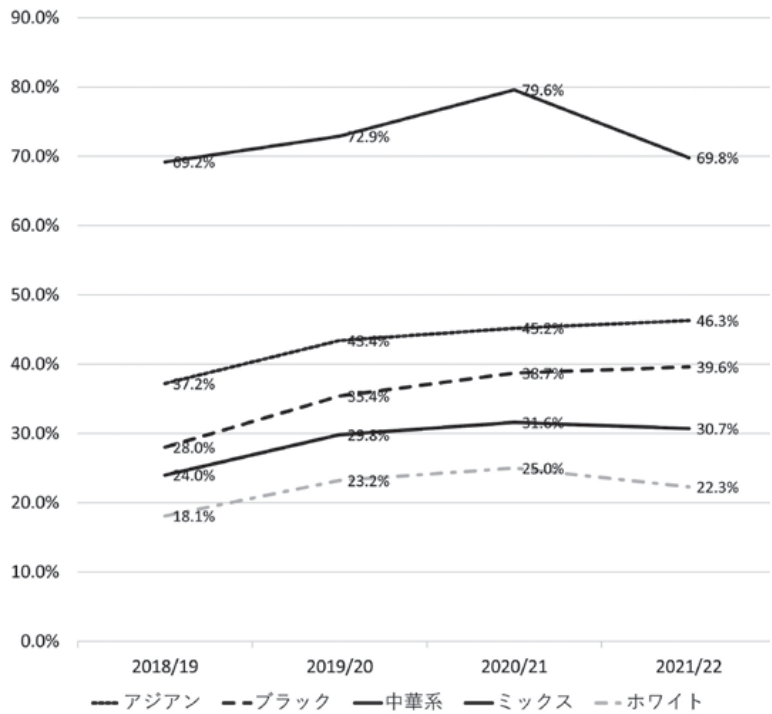


図 9.2 : 図 9.1 の通過率について FSM 生徒のみの推移グラフ

今のイングランドではもっともひどいことは近年さかんに指摘されているところだ。いうまでもなく移民は都市におおくブラックやアジア系もその例外ではない。イングランドにおける格差問題はエスニシティ間の問題というよりも、都市と地方という都鄙格差として編成されてきたといえるかもしれない。長年きびしいエスニシティだと認識されてきたアフリカンやカリビアンがいまやホワイトよりも学力が保障されており、その差を拡大しつつあるのである。もっとも FSM 生徒の割合は、ブラックが32.3%であるのにたいしてホワイトは18.7%でしかない (DfE 2022c)。つまりブラックのほうがよりきびしい生活をしているということには留意しなければならないが。

いずれにせよ、わたしたちが訪問してきた学校や団体をみるかぎりブラックとアジア系の上昇と

いう 2022 年のあたらしい結果は十分に納得がいくものであったといえる。かれらの努力はイングランド全体での成果へとつながっているのではないか。行政関係者、学校関係者、そしてユースワーカーやチャリティの運営者、そして親たちやコミュニティという子どもをとりまく人々の日々の地道なひとつひとつのところが、長年の積みかさねをへて、いまむくわれている。そうおもいたい。保守党政府の塩対応にはほとんどあきれざるばかりだが、かれらの熱意とその努力には敬意と賛辞をおくりたい。

謝辞および付記

調査にご協力いただいた学校・団体の関係者のみなさまに感謝申し上げます。なお本稿は科学研究費補助金（研究代表者：志水宏吉，課題番号：A20H00100）の助成による研究成果の一部である。

注

- (1) 大阪大学大学院
- (2) 大阪大学
- (3) 福岡教育大学
- (4) 本稿では、イングランドを主に扱うが、「英国」とする場合はブリテッシュ、連合王国（United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）を指している。
- (5) 1・4・7 節は山口，2・5 節は瀬戸，3・6 節は王，8・9 節はハヤシザキが執筆を担当した。
- (6) そもそもは同和教育から発展してきた考え方であり、通常の意味での学力（＝点数学力）と自らが置かれた被差別の立場を自覚し、差別に立ち向かう主体として自らを形成するという 2 つの要素を含む（志水 2020, p.42）。ただし、本稿の「学力」は後者を含んでいない。
- (7) 同和教育発祥のことばであり、「基礎学力の保障，勤労観の形成や生き方の探究，就職差別の撤廃など様々な取組の積み重ね」（高田 2019, p.167）が含意されているが、本稿では単に次の学校段階等への移行を指す場合もある。
- (8) 2020 年度と 2021 年度はコロナ禍の影響により、試験は中止された。
- (9) アカデミーとは、地方当局（Local Authority）から離脱して、教育省と直接契約を結ぶ学校経営形態をとる学校のことである。
- (10) Child Poverty Action Group は「子どもの貧困」に課題意識を持ち、調査研究、行政府や学校への働きかけ、保護者の相談支援や支援者のトレーニングなどの活動を行っている英国のチャリティ団体である。詳しくは、ハヤシザキほか(2023)を参照のこと。
- (11) LCS の聴覚障害者支援に関する詳細は、ハヤシザキほか(2022)を参照のこと。
- (12) キーステージ 2（小学校高学年）からキーステージ 4（中学校後半）の終わりまでのあいだに、どの程度進歩したかをはかるスコア。英語、数学など最大 8 科目の成績に基づく。
- (13) SYCT と RS の年間支出入の推移はチャリティ委員会のデータベースによる。<https://www.gov.uk/government/organisations/charity-commission> 参照。
- (14) James Taylor, 2020, *SYCT: Past and Present* available at <https://youtu.be/T7krhvIC3QA> [last accessed on 18th Jan 2023].

文献

Department for Education, 2022a, *Academic year 2021/22 Schools, pupils and their characteristics*, available at <https://explore-education-statistics.service.gov.uk/find-statistics/school-pupils-and-their-characteristics> [last accessed on 19th Jan

- 2023].
- Department for Education, 2022b, *Special educational needs and disability*, available at https://assets.publishing.service.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/1082518/Special_educational_needs_publication_June_2022.pdf [last accessed on 20th Jan 2023].
- Department for Education, 2022c, *Academic Year 2021/22 Key stage 4 performance*, available at <https://explore-education-statistics.service.gov.uk/find-statistics/key-stage-4-performance-revised/2021-22> [last accessed on 20th Jan 2023].
- GOV.UK, 2022, *Population of England and Wales*, available at <https://www.ethnicity-facts-figures.service.gov.uk/uk-population-by-ethnicity/national-and-regional-populations/population-of-england-and-wales/latest> [last accessed on 20th Jan 2023].
- ハヤシザキカズヒコ・岩槻知也, 2015, 「イギリス 疑似市場化のなかの格差是正」志水宏吉・山田哲也『学力格差是正策の国際比較』岩波書店, pp.89-119.
- ハヤシザキカズヒコ・栗原和樹・山口真美・石川結加・王一瓊, 2022, 「連立政権以降のイングランドの教育政策における排除と包摂」『令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果・報告書 学校システムにおける排除と包摂に関する教育社会学的研究』, pp.113-144.
- ハヤシザキカズヒコ・栗原和樹・王一瓊・石川結加, 2023, 「イングランドにおけるソーシャルインクルージョン」『福岡教育大学紀要』(近刊)。
- 菊地かおり, 2021, 「イギリスにおける早期離学への対応とニートへの支援」園山大祐『学校を離れる若者たち』ナカニシヤ出版, pp.56-69.
- Lister Community School, 2022, *GCSE Result*, available at <https://lister.newham.sch.uk/our-schools/exam-data/> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2012, *2011 Census*, available at <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationestimates/datasets/2011censuskeystatisticsforlocalauthoritiesinenglandandwales> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2020/21, *Lister Community School Pupil population in 2021/2022*, available at <https://www.find-school-performance-data.service.gov.uk/school/148902/lister-community-school/absence-and-pupil-population> [last accessed on 19th Jan 2023].
- Office for National Statistics, 2022, *2021 Census*, available at <https://www.ons.gov.uk/peoplepopulationandcommunity/populationandmigration/populationestimates/bulletins/populationandhouseholdestimateswales/census2021> [last accessed on 19th Jan 2023].
- 志水宏吉, 2020, 『学力格差を克服する』筑摩書房。
- 志水宏吉, 2022, 「教育における排除と包摂」『令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果・報告書 学校システムにおける排除と包摂に関する教育社会学的研究』, pp.3-17.
- 志水宏吉・高田一宏・堀家由妃代・山本晃輔, 2014, 「マイノリティと教育」『教育社会学研究』第95巻, pp.133-170.
- 高田一宏, 2019, 『ウェルビーイングを実現する学力保障』大阪大学出版会。
- 植田みどり, 2022, 「社会経済的な格差是正を目指したコロナ禍における学校の取り組み」園山大祐・辻野けんま『コロナ禍に世界の学校はどう向き合ったのか』東洋館出版, pp.238-253.
- YMCA, 2022, *Devalued: A Decade of Cuts to Youth Service*, available at <https://www.ymca.org.uk/wp-content/uploads/2022/02/ymca-devalued-2022.pdf> [last accessed on 19th Jan 2023].

学級通信にみる保護者への「お願い」

—小学校学級通信の分析を通して—

“Requests” for parents in Classroom Newsletters:
Analysis of Classroom Newsletters in Elementary School

山口 真美

Manami YAMAGUCHI

(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

本稿の目的は、小学校学級通信の分析を通して、日常生活において教師が保護者に何を伝え、求めているのかを明らかにすることである。ある小学校において1年間に発行された学級通信約280号分を分析した結果、学級通信は保護者に子どもの学校生活の様子を伝える一方で、様々な要望を伝える機能を持っていることが明らかになった。

キーワード：学級通信, 計量テキスト分析, 小学校, 「お願い」

[Abstract]

The aim of this paper is to clarify what teachers tell and ask of parents in daily life by analyzing classroom newsletters. I analyzed a total of about 280 issues of classroom newsletters published between April 2018 and March 2019 in an elementary school. In conclusion, it was discovered that classroom newsletters have the function to convey various requests while they inform parents of the school life of their children.

keywords: classroom newsletters, quantitative text analysis, elementary school, "requests"

1. 問題の所在と先行研究

学校と家庭をつなぐツールのひとつである「学級通信」は、日本全国の学校に普及している実践である。『現代教育学事典』（青木ほか1988, p.75）によれば、「学年通信・学級通信」は、「学年や学級ごとに、学校・教師の教育活動、子どもの状況、その他家庭への連絡事項などを記載した子どもや家庭への通信のこと」と説明されている。学級通信は戦前の生活綴方教育の影響を受けて始まった教育実践であり（荻間澤2002）、昭和30年前後にはその原型が見られるという（明石

1986)。近年でも、学級通信を発行しているという教員（小・中学校）は8割弱に上り、発行したほうがよいと考えている教員は9割を超えている（理想教育財団2018, p.17）。

学級通信の発行は必須ではないため、教職課程や初任者研修で学ぶ機会が必ずしも設けられているわけではない。義務でもなく負担も小さくない学級通信を作成する大きな理由としては、生徒指導や学級経営への効果がある。たとえば、社会経済的に厳しい校区の学校に勤務するある教師は「表面に表れた問題に対する直接的な学級指導・生徒指導が『特効薬』であるなら、学級通信での学級指導は、表面的には問題のない時にも、常に用意された『常備薬』と言える」（西田1994, p.332）と述べている。

しかし、学級通信の実践的蓄積に比して研究は少なく、中でも実際の紙面で何がどう書かれていて、保護者に対して何を伝えているのかというメッセージ自体の検討はなおざりにされてきた。優れた教育実践家の通信紹介や通信作成の手続き的知識をまとめた教師向け書籍が多数出版されている一方で、研究上では学級経営に主眼を置いた数点の教育実践論文のほかには、一部（大日方2008）を除いて学級通信への着目が薄い。他方、義務教育段階以上に保護者との連携の必要性が想定される幼稚園や保育所に目を移すと、お便りのメッセージを対象とし、紙面の構成要素や記載内容、文章表現等に着目した分析がなされた研究の蓄積（田中・三宅2001、箕輪ほか2018）があることから、これらを参考にした研究発展が義務教育段階においても望まれよう。

以上を踏まえ、本稿では学校と家庭の連携を支える学級通信を分析することによって、保護者に対して何が伝えられているのかを明らかにすることを目的とし、その結果から学級通信の機能を考察する。なお、本稿では、教師が学級通信をどのような思いで作成し、伝えようとしているのかという意図ではなく、保護者に届く実際の紙面の「言葉」として何が書かれ、伝えられているかという事実の分析を主題とする。分析から導かれる結果は、小規模1校・単年度の資料から分析であるため、試論的なものに留まる。とはいえ、学校で広く行われ、実践的蓄積のある学級通信に着目し、そこでの「言葉のあり方を包括的に、多面的に、細やかに追いかけてやうとするこの営みは質問紙調査によって代替されるものではないし、インタビュー調査や参与観察などもまた異なった独自の意義」（牧野2019, p.79）を持つ。

2. 研究方法

本稿では実際に児童生徒・家庭に配布された学級通信・学年通信の分析を行う⁽¹⁾。分析に用いる資料は、関西圏の公立スギオ小学校（仮名。以下、スギオ小）において2018年度に発行された1～6年生の学級通信および学年通信である。筆者は、2016年度後半からスギオ小で学習ボランティアとして参与観察を行い、教師らとラポールを形成して、資料の提供を受けた⁽²⁾。スギオ小は、各学年1～2学級、児童数約250名の小規模校である。なお、中学校や高等学校段階においても学

級通信の実践は存在するが、小学校でより広く行われている実践であり、さらに読み手として保護者が期待できるという点から小学校段階を取り上げることとした⁽³⁾。

スギオ小全体における学級通信への取り組みの姿勢を担任教師らに尋ねたところ、その発行は強制されていないという⁽⁴⁾。そのため、単学級の学年は、学年通信と学級通信の両方を発行している場合もあれば学年通信だけの場合もある。複数学級ある学年の学年通信は、担任教師らの分担や交替制で作成されている。また、発行に際しては、管理職による文章表現面のチェックがあり、子どもや保護者が不快に感じる表現や不適切な表現がある場合については変更を指示しているという。しかし全体としては、学級通信は自発的な取り組みとされており、教師らの伝えたいことがある程度自由に紙面に表れていると考えることができる。

次に、分析にあたっては、KH Coder を使用する。KH Coder は計量テキスト分析のためのフリーソフトであり、計量テキスト分析では質的方法（内容分析）と量的方法（テキストマイニング）の要素を往還して知見の算出を目指す（樋口 2014）。計量テキスト分析の利点は「データ探索」と「信頼性の向上」にあるという。本稿で計量テキスト分析を採用する理由は、学級（学年）通信という媒体に何が書かれているかを全体的に把握しつつ、その情報を用いて記事や語の内容について検討するという目的に適していると考えたからである。

スギオ小において学級通信および学年通信は、基本的に B4 版 1 枚もしくは 2 枚（裏表で 1 枚）で作成されているが、号によっては B5 版の場合もある。また、1 学級につき、多いところで 50 通程度が発行されていた。本稿で分析と対象としたのは、1～6 年生の学級通信と学年通信の全 279 号である。記事数については、基本的には紙面の割り当てに沿ってカウントした⁽⁵⁾。内訳は、1 年生 61 号（200 記事、以下同）、2 年生 50（179）、3 年生 55（211）、4 年生 22（91）、5 年生 62（161）、6 年生 29（98）である（複数学級を含む）。また、通信の中の文には、保護者と子ども向けのものが混在しているが、紙面上のメッセージはすべて保護者の目に入るという点から、本稿では誰向けの文であるかの区別は設けずに分析を進める。

分析の下準備として、収集した資料 1 枚ずつを、記事ごとにテキストデータ化した。その際、発行者（教師）が書いた部分のみを対象とした。つまり、写真、子どもの感想や作文、保護者からのメッセージ等は除外した。また、「今月（来月）の予定」として箇条書きで掲載される日付・曜日については、出現頻度が高くなってしまい分析に影響を及ぼすことから削除した。さらに、児童の名前については、分析に影響しないように処理した。こうして作成したデータベースは、延べ語数 95,873 語、異なり語数（語の種類）4,859 語であり、うち分析対象となった自立語はそれぞれ 37,417 語、4,163 語であった。

3. 結果

3.1. 頻出語から見える多量の「お願い」

まず、通信の中に頻出する語を確認する。頻出語として抽出された上位の単語は次のようになった（カッコ内は出現回数。下記の単語で全体の15%をカバーしている）。

お願い（423）、子ども（396）、思う（299）、学習（293）、頑張る（282）、時間（275）、持つ（255）、学期（250）、予定（221）、たくさん（208）、ありがとう（188）、自分（178）、運動会（172）、授業（164）、練習（149）、人（148）、学校（143）、給食（143）、国語（142）、生活（138）、先生（138）、家庭（136）、下校（134）、書く（134）、保護者（130）、見る（130）、算数（126）、夏休み（124）、教室（124）

これを見ると、1番目の「お願い」と2番目の「子ども」は400回近く登場しており、3位以下と比べて圧倒的に多いことが確認できる。保護者相手の文書に「子ども」が頻出するのは言わずもがなであるが、「お願い」は注目に値する。教師が「お願い」をする相手として児童は考えづらいので、ここから通信で保護者に対して多くの要望が伝えられていることが読み取れる。また、名詞は学校の予定に関わるものが多く、動詞では「思う」「頑張る」「持つ」「書く」という語が散見される。原文を確認したところ、「思う」は教師の推察、「頑張る」は子どもたちの努力への評価、「持つ」は「持ってくる」の形で家から物を学校に運ぶ行為、「書く」は「作文を書きました」という報告、あるいは「名前を書いてください」という要望と共に用いられることが多い。

3.2. 保護者に「お願い」する内容

前項では、「お願い」の語が頻出することが判明したが、実際のところ、どのような「お願い」が述べられているのだろうか。保護者への要望が述べられる際には、「～していただくよう、お願いします」や「～してください」という表記になることが想定される。たとえば、田中・三宅（2001）では、学級通信（園だより）において事務的な内容が多くを占めており、さらに文末が「～下さい」や「～お願いします」、「～しよう」で終わる要請・要求的なセンテンスが多いと指摘されている。そこで、保護者に向けたメッセージに付随すると考えられる「ください」⁽⁶⁾と「お願い」の語を合計して、すべての文に占める割合を算出したところ、15.5%となった。

次に、要望の中身について見ていく。具体的にお願いする内容は、要望を表す単語の前（左側）に出てくることを踏まえ、検索した⁽⁷⁾。その結果出現した「要望」と関わりの深い語を回数とともに以下に示す（カッコ内は出現回数。下記の16語で全体の約6割を占める）。

持つ (145), お知らせ (54), 協力 (46), 準備 (33), 用意 (28), 書く (21), 確認 (20), 見る (20), 来る (17), 応援 (14), 思う (14), 入れる (14), 聞く (13), 点検 (11), 連絡 (11), お話 (10)

目を引くのは、3桁に上る「持つ」の出現回数の多さである。出現数100回を超えた「持つ」について、元の文に戻って確認すると、「持たせてください」あるいは「持ってきてください」という形で、家庭にあるモノ（学校で配って家庭で保管していたモノを含む）を学校に移動させるという要望が最も多いことが分かる。たとえば、「生活科の学習で“あさがお”を育てます。ペットボトルにキャップをつけたじょうろを使って水やりをしますので、5/11(金)までに500mlの空きペットボトルを持たせてください。(中略) おうちにたくさんあれば、いくつか持ってきていただけると助かります。ふたはいりません」(1年B組5月2日)といった調子である。モノの内容を検索したところ、「タオル」が最も多く、次いで「お茶」「水筒」、あるいは「(筆者注：音読や水泳の)カード」「ノート」「お金」「コンパス」「ビニール袋」など多岐にわたっていた。また、「持つ」のほかには、「お知らせ」「連絡」といった教師への伝達をお願いする内容、「書く」「見る」「来る」など具体的な指示、「協力」「用意」「準備」という全体的なお願いなどが含まれている。

3.3. 記事内容の分析

最後に、通信に含まれる記事全体がどのような種類に分かれるのかを把握していく。ここでは、クラスター分析(Jaccard距離, Ward法)を行い、記事を分類した。この分析では、似通った語を含む文書のグループには、どのようなものがあるのかを探索できる。集計単位は、記事ごととし、同一記事内で出現する語の組み合わせを、出現パターンが似ているものと見なされるようにした。その結果、7つのクラスターに分類され、それぞれの特徴語が示された(図表1)。なお、クラスター数については、クラスター結合水準の値の変化や特徴語の係数等を総合して設定している。

特徴語を参考にすると、それぞれのクラスターは、次のような文脈のもとにあると考察することができる。すなわち、クラスター1：学習予定、クラスター2：行事の予定、クラスター3：お知らせとお願い、クラスター4：保護者への思い、クラスター5：自主学習紹介、クラスター6：運動会、クラスター7：日常生活の様子、である。

家庭との連携という側面から注目すべきは、クラスター3(お知らせとお願い)とクラスター4(保護者への思い)である。クラスター3と4においては、全体の頻出語だった「お願い」が登場している。クラスター3では、「暑くなってきました。汗拭きタオルや水筒の飲み物を毎日持たせてください。よろしくお願いします」(1年A組6月28日)や「(筆者注：冬の体育時の服装のままりについて)体調等で配慮が必要な場合は連絡帳でお知らせください」(3年B組12月3日)などから、お願いとお知らせの内容が主であると考えられる。またクラスター4では、たとえば「行事を通して、子どもたちは立派に成長することができました。これも保護者の皆様のご協力のおかげです。

クラスター1(87)		クラスター2(96)		クラスター3(148)		クラスター4(180)	
国語	0.6750	土曜チャレンジ	0.4646	お知らせ	0.4824	お願い	0.3390
算数	0.6083	始業式	0.4495	持つ	0.4413	保護者	0.3303
理科	0.5446	予定	0.4332	お願い	0.3394	思う	0.3263
音楽	0.4914	下校	0.3876	(金)	0.2795	皆様	0.3191
社会	0.4778	地区児童会	0.3469	使う	0.2062	協力	0.3091
体育	0.4643	行事	0.3134	(火)	0.2012	子ども	0.3085
図工	0.4359	開始	0.3010	場合	0.1975	家庭	0.2117
学習	0.3122	水曜教室	0.2784	体操	0.1963	学期	0.2105
リコーダー	0.3118	集団	0.2330	タオル	0.1899	ありがとう	0.1952
歌	0.3093	委員	0.2328	用意	0.1871	時間	0.1942
クラスター5(28)		クラスター6(56)		クラスター7(308)		分類不可(37)	
紹介	0.3692	頑張る	0.2057	たくさん	0.2678	()内は記事数 数字はJaccard係数 ■は仮名	
自主	0.2553	運動会	0.1515	自分	0.2458		
ノート	0.2333	練習	0.1439	頑張る	0.1971		
少し	0.1447	応援	0.1279	子ども	0.1789		
ローマ字	0.1290	延期	0.1014	楽しい	0.1778		
自己	0.1143	ダンス	0.0952	思う	0.1686		
作文	0.0727	競技	0.0952	ありがとう	0.1662		
漢字	0.0658	週間	0.0897	人	0.1630		
上達	0.0625	賞	0.0862	先生	0.1574		
手紙	0.0588	ピカピカ	0.0847	学習	0.1561		

図表 1. 記事のクラスター分析

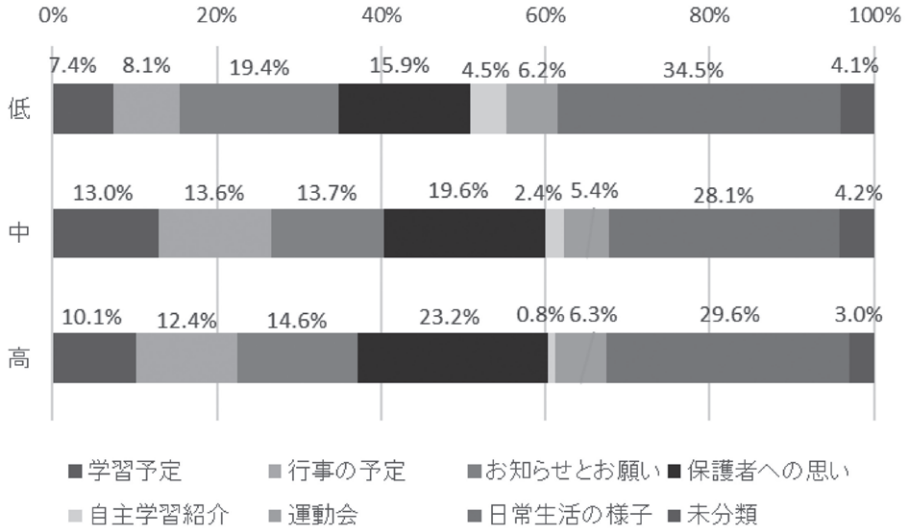
本当に「ありがとうございました」(2年学年通信12月21日)のように、「保護者」という単語が「ありがとう」や「協力」と同じ文脈で使われていることが示されており、「お願い」するばかりではなくそれに対する感謝も「保護者の皆様」と呼びかけつつ通信中で述べられていることが分かる。

そのほかのクラスターについても簡単に確認する。クラスター1では教科名が大勢を占め、通信にその月の学習予定が定期的に掲載されていることが伺われる。それに対してクラスター2では、行事に関する予定が含まれている。クラスター5は分類されている数は少ないが、特徴語から自主学習として調べてきたことや取り組んだことの紹介がなされているグループだと思われる。クラスター6は運動会関連の話題である。全国的に見ても、小学校で「運動会(体育祭)を年に1回以上」行う学校は98.4%もあるとされ(ベネッセ教育総合研究所2010)、主要な行事の一つであり、スギオ小の学級通信でも多く取り上げられていることが伺える。

最後のクラスター7は雑多なものが含まれており、日常生活の様子が描かれていることが推察される。学級通信(クラスだより)には、行事前だけに回収されない日々の教育の場面が掲載されている(柴崎・会森2016)ことを示していると言えるだろう。このクラスターに関連して、計量的に扱えない子どもたちの活動の写真や、教師の言葉でないためデータベースから除外した子どもたちの作文や行事の感想文、自習ノートが、実際の学級通信にはほとんど毎号と言ってよいほど多く掲載されていることも付言しておきたい。

また、これらのクラスターが各学年でどの割合で現れるかを示したのが、次の図表2である。どの学年段階でも「日常生活の様子」クラスターが多く約3割を占め、次いで「保護者への思い」ク

学級通信にみる保護者への「お願い」



図表 2. 学年段階別 記事の種別の割合

ラスターや「お知らせとお願い」クラスターが15～20%前後である。ただし、「日常生活の様子」は低学年で最も多い（34.5%に対して28.1%と29.6%）のに対して、「保護者への思い」は増加している（15.9%→19.6%→23.2%）。「お知らせとお願い」は低学年で6ポイントほど大きいですが、どの学年でも10%台である。低学年では初めての学校生活の様子を細やかに保護者に伝えることが通信の大きな役割となっている一方で、高学年では学校教育活動に対する保護者への感謝等を改めて伝えるという役割を担っている様子を伺うことができる。

4. 考察と今後の展望

学級通信は保護者に言葉で何を伝えているのかという本稿のリサーチクエスチョンに対する答えは、端的にいえば多量の「お願い」である（3節1項）。そして、その「お願い」の内実について、要望される内容という質的側面から検討したところ、「持つ」という動詞との関連が強いことが示された（3節2項）。ここで考えてみたいのが、学校に持ってきてほしいとお願いされるモノについてである。今回のデータからは、それほど特殊なモノの用意が家庭に要望されているわけではないように思われる。しかし、学校側からしてみれば「ちょっとしたもの」の用意が難しい家庭もある。柏木（2020, p.144）は「あってはならない差異を前提に、誰もが利用できるモノと文化を提供する学校としての仕組み」が「子どもの貧困」に立ち向かうために有効だと述べている。学級通信で伝えられる「お願い」が叶うとは限らない。持ってくるようお願いされたモノが用意できない場合に、その家庭の子が学校でどのような処遇をされているか等の学校現場の状況について検討し

ていくことは、連携の実質的な在り方を考える上で重要である。

では、学級通信は「お願い」一辺倒なのかというと、決してそうではない。紙面の記事内容を分析したところ、複数に類別されていた。そのなかでは、「お願い」とともに保護者に対する感謝が述べられていたり、日常の様子が多く伝えられていたりする傾向が読み取れた(3節3項)。つまり、ここまでを総合すると、学級通信で子どもたちの日々の学校生活の様子を伝え、あるいは保護者への感謝を述べると共に、多量の「お願い」が保護者に日々届けられ、特にモノを持って来させるという役割を期待していると言える。

子どもの学校での様子を知りたいという保護者の高いニーズ(ベネッセ教育総合研究所2018)に、学校側は学級通信だけではなくホームページやメールマガジン等、様々なメディアを通じて応えようとしている。特に新型コロナウイルス感染症流行後は、保護者が来校して子どもの様子を知る授業参観等の機会も制限されているため、そのニーズは増大していることが予想される。本稿で明らかになったのは、直接見ることができない我が子の学校生活の様子を「知りたい」という保護者の要望に対して応答しつつ、同時に多量の「お願い」を発し続ける学級通信の姿である。そして、「お願い」一辺倒ではなく学級運営や日々の教育実践への協力に対する感謝を伝える場ともなっている通信は、連携という名のもとに学校の「支援者／学習者」(Vincent2000)の位置に置かれがちであるにも関わらず国際的に見て学校教育に対して協力的だと言われる日本の保護者の姿勢(恒吉2008)の醸成に寄与してきたのではないだろうか。これに関連して、吉川(2004, p.107)は、学級通信は「連絡など単なる情報の伝達の道具ではなく、ズレをはらみながらも結びつきあうダイナミズム、つまり、関係づくりにその本質がある」と述べる。今なお保護者からの高い期待が寄せられる学級通信⁽⁸⁾について、本稿での知見を標としつつ、言葉に込められた教師(発信側)の意図と保護者(受信側)の解釈やそのズレ、あるいは相互作用について検討することが次なる課題である。

注

- (1) 学級通信と学年通信は厳密に言えば異なる性質を持つと考えられるが、保護者に対して学校の日常の様相が届けられている点では相違なく、事典等でも同一項目とされていること、事例校の単学級で片方のみを発行している学年があったことから、通信の分析の端緒を開くという点も踏まえて本稿ではまとめて扱うこととした。
- (2) 学級通信の取り扱いに関しては、学校が特定されないこと、学年・組と担任教師の情報が結びつけられないことを条件に、学校長から資料収集の許可を得た。また、各学級担任に研究の主旨を説明し、同意を得られた9学級から資料の提供を受けた。
- (3) 管理職へのアンケートで、81～100%の割合で学級通信を発行している学校が、小学校では71%に対し、中学校では45%であった(理想教育財団2018, p.46)。また、保護者へのアンケートで学級通信を必ず読むという回答は、小学校で81%であるのに対し、中学校では56%であった(同, p.68)。
- (4) ただし、1年生の初期は(ひらがなを習っておらず)自力で連絡帳を書けないため、学級通信に1週間の時間割や授業の使用物を含み、必ず発行されるという。

(5) 記事のカウントに関して、下の例で示すと記事数は4である。



(6) なお、「ください」についてはデータ中に多く存在するが、頻出語等では補助動詞（たとえば「くださる」）を扱わないのが通例のため、本稿の初めの部分では登場していない。

(7) KH Coder の操作としては、サ変名詞と動詞のみに限り、その語の前後出現数を最大値の5に設定して集計した。数値の算出方法は、KWIC コンコーダンスで、抽出語「お願い」の検索結果+「ください」（補助動詞、強制抽出指定）の検索結果-「お願い&ください」の検索結果。

(8) 「学級通信が必要」と答えた保護者は86%、小学校では90%に上る（理想教育財団2018, p.70）。

参考文献

明石要一, 1986, 「学級通信の分析」『現代教育科学』354号, pp.140-147.

青木一・大槻健・小川利夫・柿沼肇・斎藤浩志・鈴木秀一・山住正己編著, 1988, 『現代教育学事典』労働旬報社。

ベネッセ教育総合研究所, 2010, 「第5回学習指導基本調査（小学校・中学校版）」。
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail.php?id=3243> (2023年1月17日確認)。

ベネッセ教育総合研究所, 2018, 「『学校教育に対する保護者の意識調査2018』ダイジェスト」,
https://berd.benesse.jp/up_images/research/Hogosya_2018_web_all.pdf (2023年1月17日確認)。

樋口耕一, 2014, 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版。

荻間澤真人, 2002, 「学級通信記事における教師メッセージの研究」『教育メディア研究』Vol.3, No.2, pp.43-52.

柏木智子, 2020, 『子どもの貧困と「ケアする学校」づくり』明石書店。

牧野智和, 2019, 「『言葉』を分析することの意義とその留意点」『日本労働研究雑誌』2019年4月号 (No.705), pp.75-80.

箕輪潤子・秋田喜代美・中坪史典・砂上史子・高木恭子・辻谷真知子, 2018, 「幼稚園はお便りを通して何をどのように保護者に伝えているのか」『武蔵野教育学論集』(5), pp.201-217.

西田芳正, 1994, 「生徒指導のエスノグラフィー」『社会問題研究』43(2), pp.323-352.

大日方真史, 2008, 「教師・保護者間対話の成立と公共性の再構築」『教育学研究』75(4), pp.27-38.

理想教育財団, 2018, 『学校における各種通信の実態と教育効果に関する調査研究 最終報告書』理想教育財団。

柴崎正行・会森恵美, 2016, 「保育所における保護者支援についての検討」『大妻女子大学家政系研究紀要』52, pp.157-162.

田中亨胤・三宅茂夫, 2001, 「園だよりにみられる教育メッセージ分析」『学校教育学研究』第13巻, pp.99-107.

恒吉僚子, 2008, 『子どもたちの三つの「危機」』勁草書房。

Vincent, C., 2000, *INCLUDING PARENTS?*, Open University Press.

吉川成司, 2004, 「コミュニティ・ネットワークとしての学級通信」『創価大学教育学部論集』第55号, pp.99-110.

提出課題の相互評価に関する分析について

Analysis of peer evaluation of submitted assignments

小 西 敏 雄

Toshio KONISHI

(心理子ども学科子ども専攻)

要 約

ある演習科目で提出課題を相互評価させている。この結果をクラスター分析して分かったことを説明する。

キーワード：クラスター分析、分散分析、多重比較

[Abstract]

In a certain seminar subject, submitted assignments are evaluated by each other. I will explain what I found out by cluster analysis of this result.

Keywords: cluster analysis, analysis of variance, multiple comparison

1. 課題提出された作品の相互評価について

数年前から子ども専攻専門科目『幼児教育の方法』を影浦紀子先生と一緒に担当している。受講している約 50 人の学生を対象にして、私は最後の 5 回でビデオクリップ作りを教えている。

内容はパワーポイントのスライド自動切り替え機能を使って切り替え時間を設定し、動くスライドを作ることである。画像データの切り取り方から始めて、音楽データの CD からの取り方、パワーポイントの操作方法からスライドの作り方までを 4 回で教え、同時に作品を作っていく。最後の 1 回の前に作品を提出させ教室内サーバの共有領域に配置する。最終回の授業で受講学生に作品を見させて、自分以外の 49 人の評価をさせる。それを集めると、評価した側と評価された側のデータが得られる。

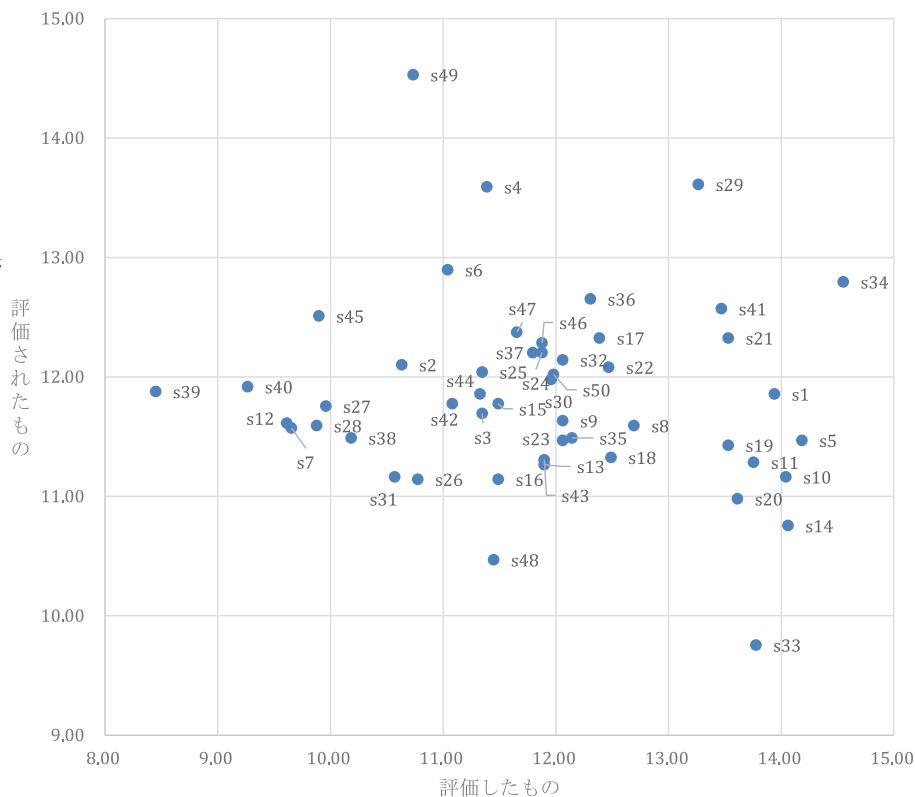
提出課題の相互評価に関する分析について

No.	評価した平均 mean1	評価したSD sd1	評価された平均 mean2	評価されたSD sd2
s1	13.94	0.98	11.86	1.75
s2	10.63	1.73	12.10	2.08
s3	11.35	0.85	11.69	1.80
s4	11.39	0.97	13.59	1.63
s5	14.18	1.06	11.47	1.86
s6	11.04	1.23	12.90	1.71
s7	9.65	1.24	11.57	1.84

例えば s1 の学生については、他の 49 人を評価した成績の平均が 13.94 で標準偏差が 0.98、他の 49 人から評価された成績の平均が 11.86 で標準偏差が 1.75 だということである。成績は 15 点満点である。すると、s1 の学生は、自分の評価は平均が 13.94 で標準偏差が 0.98 なので、割と高めに同じような点数をつけていることが分かる。ところが、評価された側は平均が 11.86 で標準偏差が 1.75 なので、評価はあまり高くなく、しかも自分がした評価よりもばらついていることがわかる。すなわち、評価した点数と評価された点数はあまり関連が無いことが分かる。

これを使って次のような散布図が得られた。

評価した×評価された平均の分布



散布図の中央部上位にある s49 の学生は他者に対する評価はすごく厳しいが、他者からは高く評価されていることが分かる。このような学生の存在が、相互評価には欠かせないと思われる。

次表は今回の評価する側・評価される側の平均と標準偏差で相関係数を計算したものである。

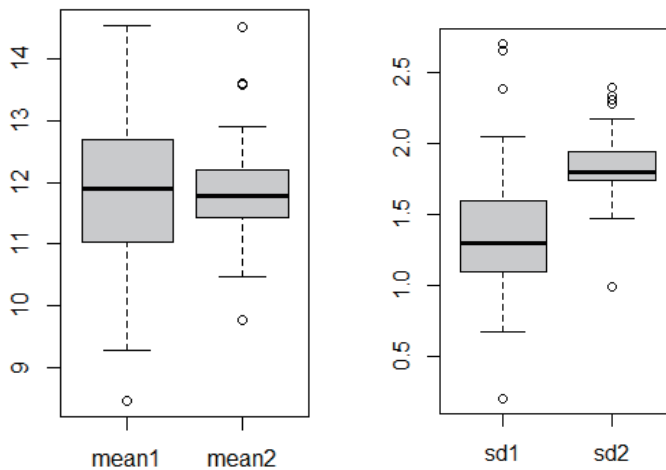
	mean1	sd1	mean2	sd2
mean1	1.000	-0.332	-0.122	0.023
sd1	-0.332	1.000	-0.055	0.058
mean2	-0.122	-0.055	1.000	-0.654
sd2	0.023	0.058	-0.654	1.000

mean1 と mean2 には当然のことながら、相関が無い。相関があった場合には何らかの事前相談や密談があったと予測される。mean2 と sd2 の相関係数は -0.654 で、負の相関が見られる。これは、成績の上限が 15 点なので、点数が上がるほど標準偏差が低くなることを意味するので、妥当な結果であると思われる。

今回のデータの基本統計量を計算した。

mean1		sd1		mean2		sd2	
Min.	: 8.449	Min.	: 0.1998	Min.	: 9.755	Min.	: 0.9918
1st Qu.	: 11.051	1st Qu.	: 1.0940	1st Qu.	: 11.439	1st Qu.	: 1.7394
Median	: 11.888	Median	: 1.3005	Median	: 11.776	Median	: 1.7967
Mean	: 11.858	Mean	: 1.3552	Mean	: 11.857	Mean	: 1.8359
3rd Qu.	: 12.643	3rd Qu.	: 1.5819	3rd Qu.	: 12.204	3rd Qu.	: 1.9352
Max.	: 14.551	Max.	: 2.7034	Max.	: 14.531	Max.	: 2.3905

今回のデータの箱ひげ図を作成した。



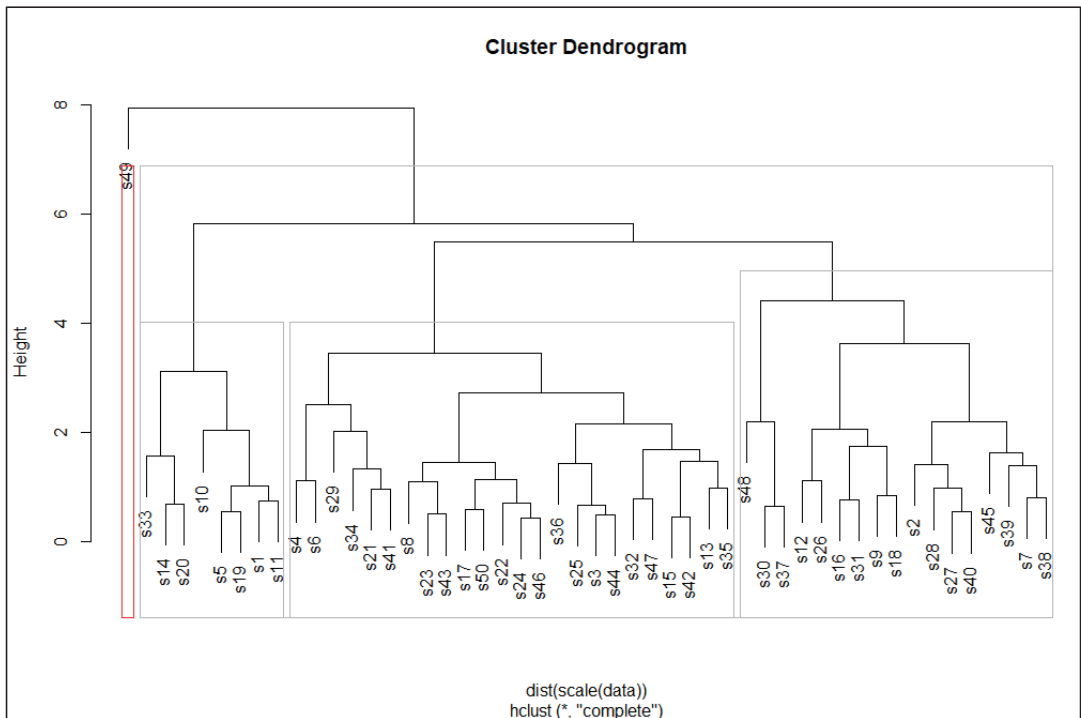
箱ひげ図から、mean2の方が箱の高さが小さくなっていることが分かる。またsdについても、sd2の方が大きくなっている。50人で評価したものがmean2であり、sd2であるので、アンケート調査で程良い標本平均やSDが得られるように、うまく評価点が出ている。mean1は各人が各

人の感覚で評価したものであり、個人差が大きく表れることが mean1 の箱が大きいことから分かる。このため、sd1には大きく離れた外れ値も多数出現している。

2. クラスタ分析

次に、今回のデータを用いて学生のタイプを分類することにした。解析には R4.2.1 を使用した。今回は、mean1、sd1、mean2、sd2 の 4 つを 1 組のデータとして扱った。

今回は距離の計算にはユークリッド距離を用いて、クラスタの結合には鎖効果を避けるために最遠隣法を使用した。結果のデンドログラムを掲載する。



結果を述べる。最遠隣法では 4 つのクラスターに分けられた。

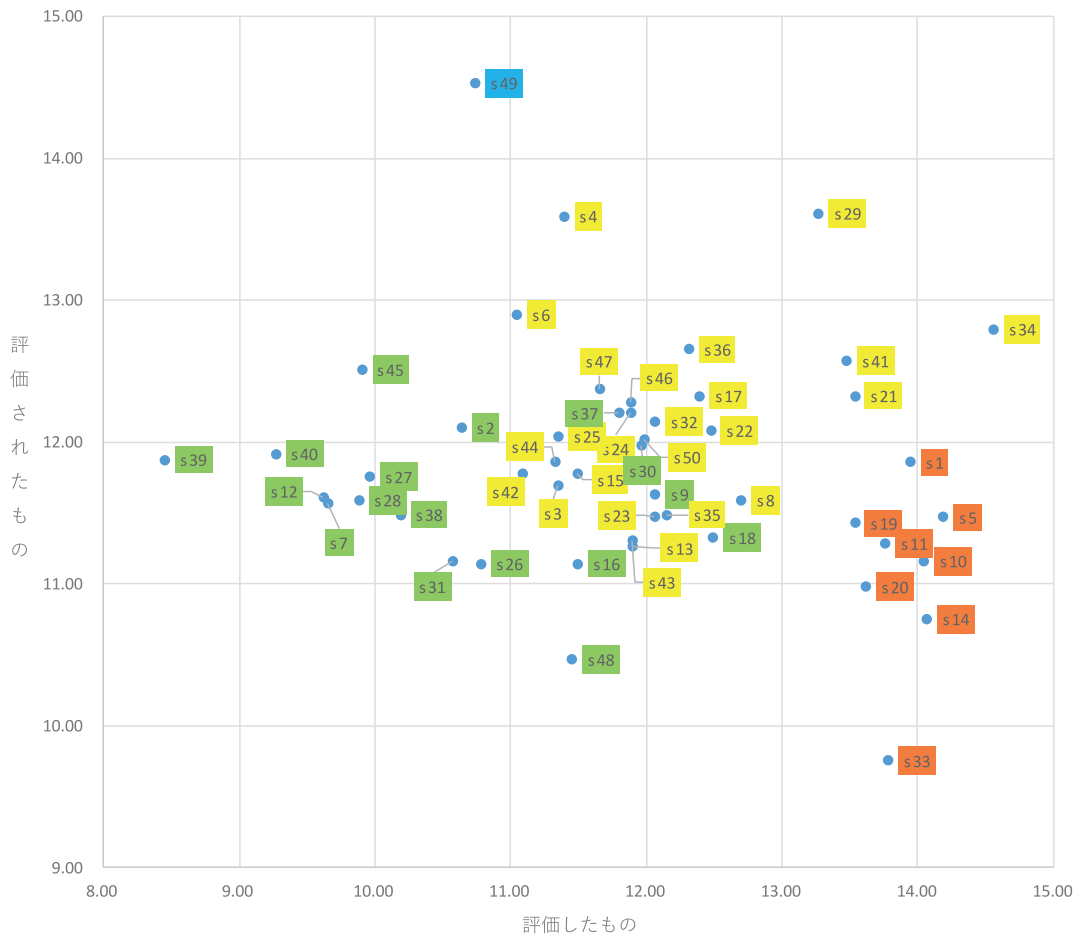
- ・ クラスター 1 : s1, s5, s10, s11, s14, s19, s20, s33 (8)
- ・ クラスター 2 : s3, s4, s6, s8, s13, s15, s17, s21, s22, s23, s24, s25, s29, s32, s34, s35, s36, s41, s42, s43, s44, s46, s47, s50 (24)
- ・ クラスター 3 : s2, s7, s9, s12, s16, s18, s26, s27, s28, s30, s31, s37, s38, s39, s40, s45, s48 (17)
- ・ クラスター 4 : s49 (1)

各クラスターの平均値を計算した。

	mean1	sd1	mean2	sd2
クラスター1	13.862	0.9680	11.087	1.9433
クラスター2	12.131	1.2316	12.173	1.7460
クラスター3	10.595	1.7128	11.617	1.9617
クラスター4	10.735	1.3367	14.531	0.9918

散布図上で各点のラベルに、クラスター1に赤、クラスター2に黄、クラスター3に緑、クラスター4に青を着色した。

評価した×評価された平均の分布



各クラスターの性格付けを行った。

- ・クラスター 1 (赤)：評価する点数は高いが評価される点数は低いグループ、他者には寛容な者。
- ・クラスター 2 (黄)：評価する・評価される点数ともに高いグループ。気前が良い者。
- ・クラスター 3 (緑)：評価する・評価される点数ともに低いグループ。自他共に厳しい者。
- ・クラスター 4 (青)：評価する点数は低いが評価される点数は高いグループ、他者に厳しい者。

クラスター 2 とクラスター 3 の境界部分は sd1 と sd2 の影響で振り分けられたと考えられる。

3. クラスターと GPA との関連

2節で行ったクラスター分けを活用して、各学生の GPA との関連を調べた。

今回の相互評価データは 3 年前学期の開講科目のため、3 年前学期までの累積 GPA のデータを各学生に割り当て、一要因分散分析を実施した。その結果は次のようになった。

まず各クラスターの群平均と全体平均は次のとおりである。

	クラスター1	クラスター2	クラスター3	クラスター4
群平均	2.5613	2.9063	2.6241	3.5500
全平均	2.7680			

次に、一要因分散分析の結果は次のとおりである。

	平方和	自由度	平均平方	F値	P
級間	1.7641	3	0.5880	3.9369	0.0139
級内	6.8709	46	0.1494		
全体	8.6350	49			

結果は 5% で有意であった。しかし、Tukey の HSD による多重比較の結果は各クラスター間での有意な差は見られなかった。

クラスターごとの GPA の平均値の大きい順は、

クラスター 4 > クラスター 2 > クラスター 3 > クラスター 1

の順であり、クラスター 1 がやはり他者評価は高いが自分の作品に対する評価は低いことが分かった。

4. 結果と考察

今回は学生の行った相互評価結果からクラスター分析を使用して、学生の評価状況をグルーピングした。本来は煩雑な計算処理が R4.2.1 を使用して比較的簡単に処理を行うことができた。また、遠距離法によって極めて効率的にグルーピングできたことは、今後の授業での活用の可能性が出てきたと思われる。

また、今回の解析を行って、学生同士による相互評価の結果を利用して、客観的に成績評価ができることが検証できたと思う。これまでも何回か学生による相互評価の結果を成績処理に活用していたが、今回の研究によって、健全な学生集団であれば実施の効果は十分にあることが分かった。

また、本論文の素案を本学特任教授の島治伸先生にお見せしたところ、3節で実施した「GPA との関係を見てはどうか」という知見を頂いた。実際に分析をした結果、分散分析は5%有意となり、相互評価結果をクラスターに分ける目的が得られた。島先生の有効な助言に感謝したい。

参考文献

兼子毅、R で学ぶ多変量解析、日科技連、2011.

赤間世紀、R リファレンスブック、カットシステム、2011.

上村龍太郎・北島良三・竹内晴彦・山下俊恵・吉岡茂、明日からビジネスで使える！Excel と R によるデータ解析入門、丸善出版、2014.

CONTENTS

Special Essays

Foreword	Keizo TAKAHASHI	1
History of the College		2
Special Essays		
Women's Choice in Gender-free Society—on the Thirtieth Anniversary of Matsuyama Shinonome Women's College	Keiko BEPPU	3
The Fundamental Spirit of College	Shigehiro ISOMURA	6
Thirty Years of Women's Education in Matsuyama Shinonome College	Chieko SHIOZAKI	8
“Old and New College” Matsuyama Shinonome Women's College ...	Eiko KAWAHIGASHI	11
English Education at Shinonome	Tatsuya MATSUMOTO	14
Preserving Local Culture: Learning from the Case of Kōshin-an	Shinobu MATSUI	17
The reflection on the historical processes and positioning on the “Founding Spirit”	Sohei TAKAKI	20
For the 30th Anniversary of Matsuyama Shinonome College What cannot be avoided in education is interpersonal communication.....	Masanori KOJIMA	23
Female higher education with unlimited potentials	Yoshikazu WAKABAYASHI	26
Reflections on the Matsuyama Shinonome Women's College Japanese Language Teacher Training Program	Rumiko MUKAI	29
Thoughts on the occasion of the 30th anniversary of the opening of the university	Toshio KONISHI	32

General Articles

Manami YAMAGUCHI • Rei SETO • Yiqiong WANG • Kazuhiko HAYASHIZAKI: Securing Academic Achievement and Transition for Minority Children and Youth Based on a fieldwork in England		35
Manami YAMAGUCHI: “Requests” for parents in Classroom Newsletters: Analysis of Classroom Newsletters in Elementary School		60

Research Notes

Toshio KONISHI: Analysis of peer evaluation of submitted assignments		69
--	--	----

紀 要 委 員

中島 悦子 (委員長、松山東雲短期大学 食物栄養学科)

西村 浩子 (心理子ども学科子ども専攻)

友川 礼 (心理子ども学科心理福祉専攻)

2023年3月1日発行

編 集 兼
発 行 者

松 山 東 雲 女 子 大 学
人 文 科 学 部 紀 要 委 員 会

(〒790-8531)

愛媛県松山市桑原3丁目2番1号

☎089-931-6211(代)

発 行 所

岡 田 印 刷 株 式 会 社

松山市湊町7丁目1番地8

ANNUAL BULLETIN OF THE FACULTY
OF HUMAN SCIENCES
MATSUYAMA SHINONOME COLLEGE

VOL. 32

【 30th Anniversary Special Issue 】

MATSUYAMA SHINONOME COLLEGE

March 2023